
ポケモン不思議のダンジョン チーム稲妻編

ブイゼル

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

ポケモン不思議のダンジョン チーム稲妻編

【Nコード】

N8016Q

【作者名】

ブイゼル

【あらすじ】

人間からポケモンになってしまった少年、ノゾム。彼は、砂浜で倒れているところを、水タイプのポケモン、ポツチャマに助けてもらう。そして、探検隊になりたい、と言うポツチャマの願いを叶えるため、そして人間になったしまったわけを知るため、ノゾムの冒険が、今、始まるうとしていた・・・。

プロローグ（前書き）

初めまして、ブイゼルと申します。これから、皆さんと一緒にポケモンの小説を書かせていただくことになります。日本語がおかしいところもありますが、感想もジャンジャンお寄せいただくと嬉しいです。これからもよろしく願いします！！

ブローグ

とある砂浜にて。

「うーん・・・」

ここはどこだろう・・・おれはどこからきたんだろう・・・

ふむふむ・・・ふむふむ・・・

ここは・・・海なのか？

そのとき、誰かがこちらへ駆けてくるのがわかった。

「ねえきみ、大丈夫!？」

俺は目を開けた。やはり予想通り海の近くにいるようだ。

そして、駆け寄ってきたのは・・・人ではなかった。な・・・なんだこの生き物!？

「よかった、目が覚めたんだね！！ボクの名前はポツチャマ。きみの名前は？」

「・・・ノゾム」

「どこから来たの？」

「・・・えーつと・・・」・・・なんでだろう、思い出せない・・・。

「・・・解らない・・・」こついいざるを得なかった。だって解らないから。

「解らないのか・・・ねえ、ボク、大きな夢があるんだけどね・・・」。

「大きな・・・夢？」

「ボクね、探検隊になりたいんだあ・・・人を助けられるような、立派な探検隊に・・・」

「いいなあ、俺には夢のひとかけらも・・・って！！」

何で俺、ポツチャマとしゃべってるんだよ！？ってゆうか俺、人間の姿じゃないよな！？

「なあポツチャマ・・・俺さ、今さ、何の姿してる・・・！？」

「なんのすがたって・・・ピカチュウだろ、なにいつてるのさノゾム？」

ピ・・・ピカチュウってー!?

どうして俺がピカチュウなんかになってるんだよ!?

俺の頭の中はパニックになってた。どうして自分がピカチュウになってるのか解らなくて・・・。

そういえば、さっきポツチャマがいつてた探検隊ってやつ・・・やつてるうちになにかわかるかもしれない

いな・・・。ポツチャマの夢を叶えるともできるしな。

「ポツチャマ、俺・・・探検隊やるよ。」

「ほ・・・ほんとに!?!」

「嗚呼、お前の夢をかなえたいんだ。それと、もしかすると探していることが解るかもしれないし、

人を助けるってやりがいあるだろ?だから・・・俺、探検隊やる。」

「あ・・・ありがとう、ノゾム!!」ポツチャマは嬉しそうな満面の笑みを浮かべた。そして、

「じゃあ、ギルドに行って登録しないとね!」と言い、

「行くよノゾム!!!」と走り出した。

「はいはい。」と俺があとを追う。

こうして、俺の探検隊への道が開けたのであった。

第一話 チーム稲妻結成!!（前書き）

いよいよ本編スタートです!!

第一話 チーム稲妻結成！！

「ついたよノゾム！」

今、俺たちはギルドの前にいる。

「早く中に入ろうよ！！！」

「解ってるって、そんなにせかさなくたっていいだろ？」

そして、ギルドに足を踏み入れると・・・。

「侵入者発見！侵入者発見！」とディグダ。

「なんだなんだ！？」とドゴーム。

「きゃー、侵入者ですわーっ！！」とキマワリ。

「お前、また来たのか！？しつこいやつだなまったく・・・。あつ
！」

俺を見るなり、

「お前ら、探険隊になりに来たのか？それなら話は違う。中に入つて親方様と話しな。」

そういつて、中に入れてくれた。

そして、“親方様”がいると思われる部屋に入った。

「何の騒ぎだい、ペラップ？・・・おや、もしかして君たち、探険隊になりきたのかい？」

「はい！僕たちを・・・探険隊にしてほしくて、ここにきました！
！」

「解った。それなら・・・ボクはプクリン。君たちの名前とチーム名を教えて。」

「チーム名で・・・どうするの、決めてないでしょ？」と俺はポツチャマに聞いた。

「君が探険隊やるっていつたときから決めてたから・・・。安心して。ボクはポツチャマ、そしてピカチュウのノゾムです。そして、チーム名はチーム稲妻です！」

チーム稲妻・・・。

「わかった。君たちは今日からチーム稲妻だよ。はい、道具だよ。じゃあ、今から探険隊の心得を教えるね。」

まだかよ・・・終わらないのかよ・・・（汗）

「以上で終わり。あ、あと朝は朝礼があるから、寝坊しないようにね。・・・はあっ！！」

『わ・・・わあっ！？』

俺たちは、衝撃波に飛ばされそうになった！！

「・・・はい、登録完了。明日から仕事だよ、がんばってね。」

『はいっ！！』

「おお、ここが部屋かあ・・・」

自分たちの部屋に入って一言。

「ベッドも悪くないな。・・・なあ、道具って何貰ったんだ？」

「ええと・・・。探険隊バッジと、おそろいのスカーフと、バッグだよ。はい、あげる！」

俺がポツチャ間から貰ったのは、赤いスカーフとバッジだ。

「ありがとう。」

夜。

「おやすみーっ！」

俺たちは明日のために早く寝た。

朝。

朝礼を終えて、仕事開始！！

「よし、がんばるぞー！！」

「おーっ！！」

こうして、俺たちの今日の仕事が始まった。

第一話 チーム稲妻結成!!（後書き）

次回は、いよいよ仕事開始です!!

第二話 初依頼！！操られたポケモンを救い出せ！！（前書き）

今回、いよいよあのポケモンが出てきます（笑）

第二話 初依頼！！操られたポケモンを救い出せ！！

今日は俺らにとって初依頼の日だ。いきなり失敗はしたくないんだけど、他のメンバーが結構依頼を持っていつてしまったので、依頼はひとつしかなかった。その依頼が・・・。

「一匹の水タイプのポケモンが、町で暴れています。しかも、言うことをぜんぜん聞かないんです。」

私たちを助けてください！お願いします！！

ロック

シティー同より

」

「今日依頼を受けないわけにはいかないし・・・今日はここにする？なんか困ってるみたいだし・・・。」とポツチャマ。

「そつだな・・・。」

俺たちはロックスシティに出発するため、準備を始めた。

ロックスティに着いた。が・・・。

「これは・・・」

依頼に書かれていた“水タイプのポケモン”がやったのだろうか。木はなぎ倒され、町も悲惨なことになっている。

「例の水タイプのポケモンがやったみたいだね。でも、何で暴れているんだ？言うことを聞かない、って」

「暴れているのにもわけがあるんだと思う。とにかく、行ってみよう！―」

しばらくして、俺たちはそのポケモンがいる場所へと向かった。

そこで、

「うう・・・」という声を聞いた。

あわてて駆け寄ると、そこには倒れているポケモン、ウソツキーがいた。

「大丈夫ですか!？」

「・・・そこに、ブイゼルが・・・。」

「ブイゼル!？」

ウソツキーが指す方向を見ると、そこにはブイゼルがいた。何なんだ、この感じ・・・。

「おいお前、攻撃するのよせよ!？」

「・・・。」

ブイゼルは何も言わずに攻撃してきた。

こいつ、自我を失ってる……。あつ！

俺は気がついた。あいつの右腕にリングみたいなものがついていることを。

「あれか！！」

「あれって？」

「ポツチャマ、あいつの右腕のリングを狙って攻撃するんだ！！」

「あれを壊せば……。自我を取り戻せるんだね！？」

「たぶんな！やるぞ、ポツチャマ！」

「うん！」

そして、あいつの右腕を狙いながら、攻撃した。すると、リングにひびが入った！！

「たぶんあれ、もろいんだと思う。ほら、ひび入ってきてるじゃん。」

よし……。あと一発決めれば！！

「十万ボルト！！！」

リングが割れ、消失した！！

「はっ！？ぼくはなにをしてたんだ！？」とブイゼル。

「戻ったみたいだね……。さて、ちょっと尋ねたいことがあって・
・。君さ、何で暴れてたんだ？」

「悪いやつらに右腕にリングをはめられて……。自我を失ってしまいました……。」

「ありがとう。そういう人たちには気をつけるよ？」

「はい！」

翌日。ギルドへと戻っていた俺たちのところに、

「チーム稲妻！お客様だぞ！！」

「はあゝい」

降りていくと、そこには昨日のブイゼルがいた。

「どうしたの？」ポツチャマが尋ねる。

「ボクは、あなたたちと一緒に探険隊をやりたいくて、ここにきました！！」

「本当！？」俺たちは目を丸くした。

「ボクを・・・チーム稲妻に入れてください！お願いします！！」

「・・・わかった。一緒にがんばろうな、ブイゼル！！」

「はい！！」

チーム稲妻に新たなる仲間ができたのであった。

第二話 初依頼！！操られたポケモンを救い出せ！！（後書き）

やっぱりかわゆいなあブイゼル！！・・・あつ、第二話完成です。

第三話　ブイゼルの実力

ブイゼルが俺たちのところに来てから一日がたった。

「明日は依頼があるだろうし、寝ようよ……。」

「ただ単に寝たいだけだろ、ポツチャマ。」

「あれ。ばれた?」

「ばればれたっちゅうの。」

「まあまあ、寝ましょうよ、明日のために。」

とブイゼル。

「ほら。ね、寝ようよ。」

「はいはい、解りましたよーだ。寝ればいいんでしょ、寝れば……!」

「まったくもう……。」

そういつて笑いながら、眠りにつくことにした。

翌日、朝礼を終えてさっそく掲示版へと向かった。

「・・・なんもない」

「ええ〜〜・・・」

「せつかくやる気になったのに・・・」

でも、いい機会でもある。なぜなら、買出しにいけるからだ。

「りんごとか買いに行かないといけないと思うんだけど・・・。」

俺はそう提案した。

「そういえば不足してたね。そうだね、買出し行こうか。」

ポツチャマも賛成した。

「今日はトレジャータウンに決まりだな。」

俺たちはトレジャータウンに行くことにした。

トレジャータウン。

「よし、買うぞー!!」

なぜか気合入れてるポツチャマ。

だが・・・。

「泥棒!!返しなさい!!」

その声は・・・。やっぱり、カクレオン商店のカクレオン!

「ど、どうしたんですか!？」

「いきなりりんごを盗まれたんだ!」

そう叫んだ。すると、

「僕が追ってきます！」

とブイゼルが走り出した。

「ま・・・待てよブイゼル!？」

俺たちはあわててあとを追った。

「ハイドロポンプ！」

「わああ!？」

俺たちがついたころには、りんご泥棒は倒れていた。

「これでよしと。」

手からほこりを払うブイゼル。

「強つ!？」

そのあと、カクレオンにはお礼としてりんごをたくさんもらった。
それにしても、ブイゼルは強いな、と思った俺でした。

第三話　ブイゼルの実力（後書き）

第三話完成です。

第四話 まさかの再会！？（前書き）

第四話、どうぞ！

第四話 まさかの再会！？

「よーっし、今日も頑張るぞ！」

「おう！」

今日も気合満々の3人。だが・・・

「今日も依頼なし！？」

マジかよ・・・。

仕方ない、今日も買い出しにいくしかないな・・・。

結局、トレジャータウン。

だが・・・。

「ほんとにここにいるんだな？」

「ほんとよ。探し出して、もう一回操ればいいんだから・・・。」

そう、ひそひそと話す二人がいた。

「こんどこそ、逃がさないわよ！」

しばらくして・・・

ブイゼルの前に、怪しい二人がやってきた。

「この間はよくも・・・。」

「やってくれたな！」

「あーっ！？」

ブイゼルは叫んだ。

「この間・・・僕を捕まえて、操った人たちじゃないか！？」

「だから何よ。さあ、来なさい！」

「いやだ！」

「だったら、力ずくで行くまでよ！」

ブイゼルと二人組の戦いが始まった・・・

第四話 まさかの再会！？（後書き）

第四話完成です。

第五話　ブイゼルVS二人組！（前書き）

第五話、スタートです！

第五話　ブイゼルVS二人組！

「おい、ブイゼル、どこにいるんだよ!？」

俺たちは、ブイゼルを探していた。

目を放した隙に、いなくなってしまったのだ。

「手分けして探そう!！」

「そうだね!」

俺とポツチャマは、手分けして探すことにした。

そのころ・・・。

「アクアジェット!」

「無駄だ！守る！」

ブイゼルが戦っているうちの一匹、ゴローニャは、効果抜群である
アクアジェットを守るで回避してしまった。

「いまだ、ユキメノコ！」

「絶対零度！」

「うわっ！？」

ブイゼルは、絶対零度を受けてしまった！

地面にたたきつけられたブイゼルは、1回バウンドした。

凍り付いてしまったブイゼルの様子を見て、ゴローニャは、

「今日はうまくいったなあ。さ、早く帰ろっぜ。」

そういうと、ブイゼルを背負い、ユキメノコとともに去っていった。

「ブイゼル！」

ずーっと探していた。

でも、見つからなかった。

そのとき、向こう側からポツチャマが走ってきた。

「ノゾム、見つかった!？」

「いいや・・・手がかりすらなかった」

「僕も・・・」

しばらく黙り込んだ。そして、ポツチャマが口を開いた。

「ノゾム、プクリン親方に言ったほうがいいんじゃない？」

「だよな・・・」

そっとうわけで、ギルドに戻ることにした。

「・・・そんなことが・・・」

親方も、これにはびっくりしたようだ。

「俺が目を離さなければ・・・」

「大丈夫、みんなに言っておくから。」

親方はそういつて、俺たちに寝るよう言った。

仕方なく、俺たちは寝ることにした。

第六話 ブイゼルの危機！？（前書き）

第六話スタートです！

第六話　ブイゼルの危機！？

朝。

「ブイゼル・・・大丈夫かなあ・・・」

ポツチャマがつぶやく。

「行方不明・・・か」

俺もつぶやいた。

長い朝礼を終え、掲示板を見た。そこには、依頼がたくさんきていた。

「やるの、ブイゼルがいない中で？」

ポツチャマが聞いた。

「ウン・・・。」

確かに、ブイゼルは一度も依頼を受けたことはない。それに、仲間がピンチなのに行くなんて、あまりにも情けない。

そのとき、

「あつ、いたいた！」

そういつて手招きをしているのはプクリン親方。

「だいぶ調べてみたよ、あのゴローニャとユキメノコについて！」

「ホントですか!？」

そういつて、親方についていった。

向かった先は、もちろん親方の部屋。

「それで、やつらはどうやらいろんなところに基地があるおおきな会社の一員なんだそうだ。うわさによれば、いろいろな力を集めるとか何とか・・・。」

そういつて、印刷してくれたであろうマップをもらった。

「たぶん、ここら辺で一番近いここにいると思うんだ。だから、そこに行ってみるといい。」

「ありがとうございます!」

そういつて、俺たちは基地を後にした。

（ブイゼル目線）

「・・・あれ？」

目が覚めた僕。

ここは・・・どこなんだろう・・・。

見渡したけど、あるのは機械ばかり・・・。

ホントにここ、どこなんだろう!?

ってか逃げなくちゃ・・・!?

あつ、足が鎖につながれてる!!?

「おきたな、浮き輪・・・。」

「こいつのあだ名、浮き輪なの!？」

「何でもいいだろ・・・。」

そこにいたのは、あのゴローニヤとユキメノコ。

「・・・さて、やりますか!」

そついつて、スイッチらしきものの方へと歩いていく。

「お前の力、利用させてもらっぞ。」

スイッチが入った瞬間、僕は意識を失った・・・。

(ノゾム目線)

着いた先は、リーフシティ。

待ってるよ、ブイゼル!!

第六話　ブイゼルの危機！？（後書き）

第六話、完成です！
次回もお楽しみに！

第七話 ブイゼルの力！？急げ、ノゾム！（前書き）

変なタイトルですみません。ハイ、スタートです！

第七話　ブイゼルの力！？急げ、ノゾム！

俺たちは、アジトの中に入った。

「・・・なんかいやな予感がする」

「俺もだ、ポツチャマ」

奥に進むにつれ、俺たちの不安は増していくばかり。

「ブイゼル・・・無事でいてくれっ！」

そっついながら、進んでいった。

やがて、ビルの3階へとやってきた。

“マシングルーム”と書いてある部屋の前に立った。そして、中に入った。

「ブイゼル！」

なかにはいつたら、ゴローニャとユキメノコがいた。

「お前ら、こいつの仲間か？」

「そうだ！だからここにいるんだよ！」

俺が言うと、ゴローニャは笑い出した。

「・・・残念だが、お前らの仲間ではないぞ！」

「な・・・なんだって!？」

そういうと、バイゼルが姿を現した。

目が、いつもよりも輝きを失っている・・・。

「こいつは、俺たちの仲間だ！」

「そんな・・・。」

俺は、バイゼルの方にかけていった。

「バイゼル・・・」

そついうが早いのか、バイゼルはにらみつけてきて、俺にハイドロポンプを当ててきた！

「バイゼル！思い出せ！」

「・・・」

またしても、俺はハイドロポンプを食らってしまった。

「ブ・・・ブイゼル・・・」

それにしても、俺にとっては効果がいまひとつのはずのハイドロポンプがこんなに利くなんて・・・
なんて威力なんだ!!

「・・・大変よ、ゴローニャ!」

「なんだ!？」

「それ・・・ほっておいたら死んじゃうわよ!!」

「何・・・!？」

ブイゼルが・・・死ぬ!？

第七話　ブイゼルの力！？急げ、ノゾム！（後書き）

第七話完成です！

次はどうなることやら・・・

第八話 奇跡（前書き）

一週間ぶりぐらいかな（汗）

第八話 奇跡

「ブイゼルが・・・死ぬ!？」

「そんな・・・」

ポツチャマが泣き崩れた。

「嫌だよ・・・死なないでよ・・・」

俺はその一言でキレてしまった。

「何言ってるんだよ!ブイゼルは死なないだろ!？泣くなよ!！」

「・・・そういうノゾムだつてえ・・・」

・・・ほんとのところ、俺も泣いていた。

「でも、このまま死んだらどうするんだよ!？何か方法があるだろ!?!？」

泣きながらも、そういった。

「・・・そうだね!」

ポツチャマは涙をぬぐい、立ち上がった。

「今助けるよ、ブイゼル!」

そういつたときだった。

ドサッ・・・

・・・まさか!?

振り返る。

衝撃的だった。

ブイゼルが・・・倒れてる・・・!?

「うそだろ・・・!?!」

思わず声を上げてしまった。

「そんな・・・」

俺はブイゼルのそばに駆け寄り、

「起きろよブイゼル!」

体をゆすつた。

でも、何をしてもおきなかった。

頬に、暖かい液体が流れる。

「ブイゼルーっ!」

そして、俺の涙は、ブイゼルの顔に落ちた。

その時、ブイゼルの体からまぶしい光が！

まぶしすぎて、目をつぶってしまった・・・。

目を開けると、そこにはブイゼルがいた。

でも、無傷だ・・・。

「ごめんね、ノゾム！」

頭を下げるブイゼル。

俺は抱きついた。

「無事で、よかった・・・」

そして、ポツチャマも抱きついた。

「く、力を使ったか・・・」

ゴローニヤがつぶやく。

力・・・？

「ま、今はとにかく外に出よう！」

外に出た。

「ギルドに戻るぞ！」

「うん！」

俺たちは、ギルドへと向かった。

第八話 奇跡（後書き）

完成！

第九話 依頼（前書き）

短いタイトルですみません！

第九話 依頼

ブイゼルを助けて、ギルドへと戻った俺たち。

親方に話して、寝なさい、といわれ、結局寝た。

朝。

「あゝ、よく寝た!」

ポツチャマが伸びをする。

「へとへとだけど、今日こそは依頼をとるぞ!」

「オーツ!」

朝礼を終え、掲示板へ。

「あつた！」

そこには、確かに一枚の紙が貼ってある。

「え〜つと・・・」

「助けてください！ここ最近火事が絶えないのです！至急、プレインシティに来てください！」

「だつて。」

「チーム稲妻にとってはいい依頼だよ！水タイプ二人いるし！」

「・・・稲妻ってついた意味ねーじゃんかよ」

とにかく、出発することに。

プレーンシティ。

物が燃えた後がいつぱいある。

山の方もまだ燃えているし・・・。

森も燃えてるし・・・。

「ポツチャマ、結構大変なんじゃないか？」

「頑張るから大丈夫！」

そういつて、まずは森の方へ。

「暑いな・・・」

さすがに燃えているので暑い。

その時、ブイゼルが・・・。

第九話 依頼（後書き）

中途半端ですみません！

第十話 ときどきの連続！再びフイゼルの力炸裂！？（前書き）

久しぶりの投稿です！

第十話 ときどきの連続！再びブイゼルの力炸裂！？

「僕に任せて！」

ブイゼルは僕らに、自分から離れるように言った。

「できるだけ離れて！」

そして、ブイゼルの体が光り始めた！

あの光は・・・この間、ブイゼルが発した光と同じだ！

「何しようとしてるんだ！？」

「わからない・・・でも、何か考えがあるんだよ！」

ブイゼルは光の玉の中で、何か強く念じた。

そして・・・。

光の玉の周りに水が！

「わかった、ブイゼルのやろうとしていることが！」

「何？」

「この火を消そうとしてるんだ！」

「なるほど！」

ポツチャマが納得する。

「この辺に、まだ炎タイプのポケモンがいるかもしれない・・・よね？」

「そのときは、俺たちで何とかしよう！」

光の玉の水が、一気に放出された！

森の炎はどんどん消えていく。

「すっげー・・・」

そのとき！

「ぎゃー!!」

声がした方を見ると、

「お前は・・・？」

そこには、黒いポケモン・・・デルビルが。

「く・・・効いたぜ・・・」

「お前を、逮捕する！」

「な！？俺は簡単にはつかまら・・・」

「逮捕」

「なーっ!!?」

即、逮捕してしまった。

一件落着!

ギルドに戻り、懸賞金と木の実詰め合わせをもらった。

「やったな、ブイゼル!」

「うん・・・」

「どうしたんだ、ブイゼル?」

「いや・・・別に・・・」

突然、ブイゼルが倒れた!

「ブイゼル!?!」

「ブイゼルが・・・倒れた!？」

「そうなんだよ・・・疲れがたまっただんな。」

「明日の依頼、どうする？」

「・・・行ってきたいい・・・よ」

息を切らしながら、ブイゼルが言う。

「行ってきたいいよって、お前・・・」

「だって、今日にはお医者さん来るし・・・大丈夫・・・だから・・・安心して・・・気にしないでいいよ」

「ブイゼル・・・」

「わかった!早くよくなれよ!」

「うん・・・!」

第十話 ときどきの連続！再びフイゼルの力炸裂！？（後書き）

かんせーい。

第十一話 仲間のピンチ!どうする、ノゾム!

「・・・ゾム!起きろよ、寝坊だよ!」

誰だよ、人(?)がこんなに気持ちよく寝てたのによ・・・

「ノゾム!」

「・・・なんだよ・・・」

俺はふと目線を時計に走らせた。

「6時半・・・じゃねえ!?」

「だから起こしたのに、ノゾムったら・・・」

「いいから!急げ!!」

「・・・はいはい」

おれは昨日夜12時までおきて、ブイゼルの看病をしていた。

でも、熱は下がらないし・・・

ブイゼルも、

『いいから、明日は依頼に行つて!』

と言う。

だから今日は依頼を受けることにしたんだ。

下りたら、まだ朝礼の途中だった。

そーっと、みんなに紛れ込んだ。

「ふう〜・・・危ねえ、危ねえ！」

朝礼が終わった。

とりあえずブイゼルのいるところに。

「ブイゼル？入るよ？」

「・・・ああ、ノゾム、ポツチャマ。今日は依頼に行くの？」

「うん、できるだけ短いのでやるけど。」

「そう・・・。ごめんね、ノゾム。足引っ張っちゃって。」

「いいや、気にしないでいいよ。」

「……ごめん！」

頭を下げるブイゼル。

「そんな……いいよ、ブイゼル。じゃあ、俺ら行くから。」

俺は言った。

そして、ブイゼルのいるところを後にした。

そして今日の依頼場所。

トレジャータウンからは、そこまで遠くない。

世界一熱い町、ファイヤータウンだ。

情熱家がたくさんいると聞いたのだが……。

「……熱くないな」

「ひんやりしてる」

その時、ポツチャマが、

「・・・これ、水タイプの技で暴れた後なんじゃない？」

「・・・そうかも」

明らかに、この「熱い国」がこんなにひんやりしているはずが無い。

町の名前にも、「ファイヤー」と入っているのだから。

「よし、行くぞポツチャマ！」

「うん！」

そのころ、ブイゼルは・・・

「へつくしょん！！」

たまたまくしゃみが出ただけだ。

しかし・・・

「この間はよくも・・・」

「くると思ってた」

そう、ゴローニヤとユキメノコ。

「だけど、僕の熱が下がってから出直してくれないかな？」

「誰がお前の言うことを聞くと思ってるんだ」

「だろうね」

そっいうとブイゼルは立ち上がり、

「やるしかないか」

「ああ、もつともだ」

と、バトルをしようとしていた――。

第十二話　ブイゼルVSゴローニャ・ユキメノコ！変化する力！！（前書き）

超長編の後って書きにくいよな・・・。

一応、ブラックストーンの現ボスが捕まったただけだから、新ボスとかありますね。

超長編はあまり関係ないです、はい。

第十二話 ブイゼルVSゴローニャ・ユキメノコ！変化する力！！

「アクアジェット！」

技を放ったブイゼル。

「がんせきふうじ！」

「冷凍ビーム！」

ゴローニャとユキメノコも対抗しようと技を繰り出す。

でも……。

「その冷凍ビーム、借りるんで！」

「！？」

「うおりゃあっ！！」

「何！？」

ブイゼルは、アクアジェットごと冷凍ビームに当て、凍ってしまった！

しかし、勢いは失せなかった。

そのまま突っ込んでいった！！

「きゃあああああ!？」

「うわあああああ!！」

二匹とも叫んだ。

そして次の瞬間、二匹は倒れていた。

「ふう……」

手からほこりを払うしぐさをするブイゼル。

「乱入してくるのが悪いんじゃないの？」

そう一言言い残し、部屋から去ろうとした。その時、

「何があったのかい？ずいぶん騒がしかったけど……」

と、親方がやってきた。

「いや、別に、僕を連れて行こうとしたやつらがいまして……倒しただけです」

「何だ、よかった……」

胸をなでおろす親方。

「まあ、無事で何よりだけど。寝た方がいいんじゃないの？」

「ですね」

ブイゼルは寝ることに。

一方、俺たちは・・・。

「十万ボルト！」

「守る！」

ファイヤータウンを冷ました水タイプのポケモン、キングドラと戦っていた。

守を二連続で使ったキングドラは守りきれず、倒れた。

不思議なことに、どんどん熱気が増えていった。

「ありがとうございます！」

この町に住むヒトカゲが頭をぺこぺここと下げてくれた。

そして、トレジャータウンに帰ろうとしていた。

一方、ブイゼル。

「熱もだいぶ下がったみたいだなあ・・・きっと依頼は成功してるよね・・・ん!？」

ブイゼルは、尻尾に違和感を感じた。

「・・・？」

しかし、これが、水を従える力が強くなったことを意味していることに気がついたのは、まだ後のことだ。

「たっだいまー！！」

元気よく帰ってきた俺たち。

「お帰り・・・」

尻尾にまだ違和感を感じているブイゼルだったが、気にしないことにしたらしい・・・。

第十二話　ブイゼルVSゴローニャ・ユキメノコ！変化する力！！（後書き）

途中、アニメと似てる（というより同じ）ところが出てきましたが、まあそこは気にせずに。

第十三話 ポツチャマの悲劇（前書き）

今日は思い切ってドジ系行くぞ！！

第十三話 ポツチャマの悲劇

「あーっ!？」

朝。

ポツチャマが突然叫んだ。

「なんだよ…せっかく寝てたのに」

俺が迷惑そうに言った。

「…何い？」

ブイゼルが眠たげに声を上げる。

「スカーフがない!!」

ポツチャマが泣きそうになりながら叫んだ。

「えっ!？」

俺たちはビックリした。

「スカーフがない…って探検隊のあかしだぞ!？」

「しかもあれにはバッジが…」

探検隊バッジがなかったら、探検隊とは言えない。

「それやばいんじゃないの？すぐに探さないとー!!」

「そうだねー!!」

「うん…」

バッジは確実にポツチャマの枕元にあつた。

昨日の夜、ポツチャマがスカーフを枕元に置いていたところは見た。

「ベッドの近くは？」

「ない…」

「床に落ちてたりしない？」

「全然…」

これはまずい。

探検隊バッジがないって相当な問題だ。

「もしかして、風で飛ばされたのかも！！昨日、風強かったし！！」

「あ、そうかもな」

…待てよ？

昨日、俺、ちゃんと窓閉めたぞ！？

となったら…。

盗まれた！？

「ちよつと親方に聞きに行ってくる！！」

そついうと、俺は部屋から一目散に走りだした。

「親方！！大事な話が…」

「うるさいぞノゾム」

そういつてやってきたのはペラップ。

「ポツチャマの探検隊バッジがなくなっただから、俺は探しに来たんだ！！」

「そりゃ問題だ！！」

「知らない？ペラップさん」

「よくわかんない」

その時、親方が出てきた。

「どうしたんだい？ノゾム君」

「あ…親方！！ポツチャマの探検隊バッジがなくなっちゃったんです…」

「…ここにあるよ?」

「はい!？」

「ここにあるんだって」

「なんでですか!？」

「いやー…だいぶ基地がデジタル化してきたから、探検隊バッジにGPS機能つけようと思って…。どうかした?」

「お…親方!!ポツチャマめっちゃ困ってますよ!？」

「ああ…もちよつとで終わるから、よろしく言っといてくれ」

「お…」

「なんだよお!!」

「犯人親方じゃないかよお!!」

仕方なく、ポツチャマに知らせに行った。

「なんじゃそりゃ!」

「親方あ…」

「必死になつて探して損した…」

「ほんとだ」

ポツチャマは肩を落としていたけど、同時にほっとしていた。

「でも、あつてよかった!」

「だな!」

その後、ポツチャマは親方をちよいと睨み付けたそうなの…。

第十三話 ポツチャマの悲劇（後書き）

ブイゼルでできましたが、この章が終わるまで彼はまだいるということ。

第十四話 ジュプトル参上!! (前書き)

この小説の重要人物が登場です。

ほとんど原作に沿ってるので、まあやったことがある人はわかると思います。

というわけで、スタートスタート♪

第十四話 ジュプトル参上ー！！

「ふうゝ…朝からひと騒動だったなあ…」

「ほんとだよ」

ポツチャマのスカーフを見つけて、依頼に向かう俺たち。

「…で、今日の依頼は？？」

「食い逃げ犯を捕まえろ、だよ」

「…で、僕たちはどこに向かって歩いてるの？」

「オアシスタウン」

「…草タイプのたまり場か」

しばらくすると、オアシスタウンが見えてきた。

草タイプのポケモンが、楽しそうに水場に入って（ものすごく浅い）遊んだりしていた。

「…ここ、すごく平和そうに見えるんだけど」

「食い逃げとかあんのかなあ…」

しかも、この大自然。

食い逃げできる店自体、まず見つからない。

「…ていうかさ、食い逃げ犯を捕まえるっていう依頼、完っ全にザコだよな僕たち」

「言えとる」

「…あれ？ブイゼルは??」

「あそこ」

ブイゼルは何をしているかといえば…。

ちびつこと水かけ合戦（汗）

「なにしてんだよブイゼル!!」

「だって、水かけられたから、挑発に乗っちゃって…」

「お前、いい歳して水かけ合戦すな!!」

「すびません」

どうやら、鼻に水が入ったらしい。

「いいから、食い逃げ犯を捕まえるぞ!!」

「分かったよノゾム」

その様子を、はるか高く、一匹のポケモンが見ていた。

「あれはもしかして…？」

そうつぶやくそのポケモン…ジュプトル。

「…再会もいいけど、まずは星の停止を…何とかしないとな」

再びつぶやいた。

そついうなり、どこかへ飛び去ろうとした。

だが……

「！？」

足をくじいてしまった!!

「さっきの戦いのせいか…」

さっきまで戦っていたらしい。

さっとバッグから包帯を取り出し、巻いて、リングをかじり、飛び去って行った…。

…森に…何か見えた…？

気のせいか…？

でも…

「おいノゾム、行くぞレストラン!!」

「う、うん…」

「あー!!あれじゃねえの、食い逃げされたレストラン!」

「…お腹減ったから、まずは食べようよ」

「そうすつか」

というわけで昼飯の時間。

「えー、ドリアとオムライスとスパゲッティください」

「かしこまりました、少々お待ちください」

しばらく待って、注文した品々が来た。

そして俺は、オムライスにケチャップをかけまくった。

「ノゾム、君は子供か!？」

「大人で子供の微妙な時期」

「そうだろうが!?!…え?あ、あのなあ、何でケチャップそんなに
かける必要があるんだよ!？」

「俺のこだわりだ、好きにさせてくれ」

ブイゼルは既に美味しそうにスパゲッティを食べていた。

「いただきまーす」

ケチャップでまみれたオムライスを頬ばった。

そして食べ終わった。

「じゃあ…店長に聞いてみるか」

そついうと厨房に行った。

「店長さん!! 食い逃げ犯って誰ですか?」

店長であるトロピウスに聞いた。

「食い逃げ犯?…そんなの、ここには来てませんよ」

「え!?!」

「ちなみに、こちら辺のレストランといえば、ここしかないんです」

「つまり…この町じゃないんですか!?!」

「ああ…なんかの間違いじゃないですか?」

「（ガーン!!）」

みんな、ショックを受けた。

帰る途中に、海でおぼれていた人を助けた。

そのまま、肩を落としながら、ギルドへと戻った。

「…気をつけな、これはイタズラ依頼だ」

「やっぱり……」

「もう、こっちは疲れただろ？オアシスタウンは結構遠いし」

「…（涙）」

「なくなよおい！！もう部屋に入って寝とけ！！」

「はい」

しゅしゅと、部屋にはいる俺たちであった。

「今日は、最悪な一日だ…」

ポツチャマが言う。

「ほんとだよ、お前のスカーフとイタズラ依頼…。」

「僕じゃなくて悪いのは親方だろーが！！だって夜中にとられたなんて知らなかったし！！」

「あーはいはいすみませんでした」

「むっ（怒）」

「まあまあそお怒らずに！！ね？二人とも、そこは抑えようよ」

ブイゼルがお互いすねあう俺たちに声をかける。

「ブイゼル、お前は黙ってろ」

「…むっ（怒）」

三人で訳も分からないまますねあうこと三十分。

「…なあ、俺さ、さっき謎の影を見たんだ」

沈黙を破ったのは俺だった。

「謎の影？」

「さつき、山の方に…緑色の、頭から葉っぱはやしてるポケモンがいたんだ…」

「…いた？そういうの」

「俺は確かに見たんだ！…！」

「何もそんなに真剣にならなくてもいいじゃない…」

「なんか突っかかるんだよなあ…ま、いつか」

俺たちは眠りについた。

第十五話 「番外編」チーム稲妻劇団（前書き）

ノゾム

「ここもネタ切れか」

切れた。

後、前話の最後はまだ出すのが早かったというわけで、消しました。
いつか出てきますねあのシーンは。

大事ですから…。

じゃあまあ番外編どうぞ！！

第十五話 「番外編」チーム稲妻劇団

「ノゾム！！依頼だよ依頼！！幼稚園で…劇！？」

「劇？なんじゃそりゃ」

「ラッキー幼稚園で劇をしてくれって…」

「最近ホントにザコ依頼多いよなあ…」

「そうか？」

「楽しいからいいじゃん」

ブイゼルは常に楽しそうだもんな。

しかし…劇かあ…

難しいな…。

「で、劇って何するの？例えば…桃太郎？」

「人形劇でいいでしょ」

「いや、紙芝居だよ」

「おお…じゃあ俺も紙芝居で」

ポツチャマは、あっけなく自分の案が撤去されてしまったのに驚き、

「ちょ…ああもう…」

うんざりした様なドヤ顔になった。

「もういいよ…紙芝居で。でも、普通のだったらみんな知ってるし、ちよっと変えてみない？」

「どういうこと？」

「改じてくれよう桃太郎ってことでどすか？」

「ああいいなそれ!!」

「じゃあどんな感じで？」

「ちよつとさあ…桃太郎をヤンキーにしようよ」

「なんで!？」

「面白くするために」

「幼稚園児用だろ!？なんでヤンキーなの!？」

「じゃあ…そうだなあ…女にしよう」

「桃子？」

「そんな感じ」

ブイゼルは主人公桃子をさらさらと書いていく。

しかもうまい。

「で、おじさんが川に洗濯に行つて、おばあさんが竹を切りに行くのね？」

「すべてをひっくり返してるだけかよ」

「それで、おばあさんが竹を切ると、中にはぎゅっぎゅっにももが入つてて、果肉がすごいことになってたと。」

「おおいいなあそういうの」

「それで、つぶれかけた桃を家に持つて帰つて、家で捨てようとしたら、桃子が生まれたと」

「なんの伝説！？」

「つーかおばあさん桃子捨てるの！？」

「それで、愛情込めて育ててきたけど、結局ヤンキーに」

「するな！！つーかざけんな！！」

「わかった分かった。えっと、そうだな……。じゃあフツーに鬼退治に行こうとして拾ったエアームドとヨーテリーとヤナップを連れて、鬼退治に向かいました。ビキニ団子を持つて」

「なにその団子！？黍団子でいいでしょ！？」

ポツチャマは話を続ける。

ブイゼルは絵を描き続ける。

そして俺は突っ込み続ける…。

そうしているうちに三十分経過。

「よーっシャーできた！！行くぞ幼稚園！！」

幼稚園へと向かった。

「…桃子は船で戻る途中に事故に遭い、遭難して足をつり、海に溺れていきました。すると、なんと竜宮城が現れました！！桃子はそこへと行き、楽しい時を過ごし、玉手箱をもらって、再び海の上に浮上しました。そして戻り、おばあさんのところに駆け寄り、「ただいま私の奴隷」といいました。おばあさんはもうなんて言えばいいのか分からず、桃子から玉手箱を奪い去り、玉手箱を開けて、年を取りまくり、死んだとさ。おしまいおしまい」

幼稚園児の反応は言うまでもない。

番外編

END
.

第十五話 「番外編」チーム稲妻劇団（後書き）

つまり、幼稚園児はシラケた、ということです。

第十六話　あり得ない

「くぁーっ…今日もいい天気だなあ…」

朝から大あくびでたいそう眠そうにする親方。

「それにしても…ジュプトルか…また厄介なのが出てきたなあノゾム」

「厄介？」

朝から、俺は親方にこの間のジュプトルについて話を受けていた。

「実はね…あいつは、時の歯車を盗む泥棒として有名で」

「時の歯車？」

「あ…知らない？」

しかし、親方は一瞬考え込んだ。

「…君さ…もともと人間だとか言ってたよね？」

「はい」

「もしかしたら、時の歯車が関係あるかもしれない…」

「いやだからなんなんすか時の歯車って」

「ああ・・・時間を飛ばしたり、時間にかかわるすべてにおいての重要な歯車で・・・」

その時！！

「親方！・・・大変です！！森が止まりました！！」

「・・・止まった？」

「あのお・・・葉っぱとかが宙に浮いたままだったり、ポケモンたちが止まったり・・・」

ビッパと呼ばれるポケモンが、心配そうにこちらを見つめた。

「ビッパ・・・みんなは無事か？」

「いえ・・・あの中にはたぶん、チームブライツが・・・」

「マジか・・・」

「どうします？救助に向かった方がいいですか？」

「いや・・・チーム稲妻がいく」

「ええ！？」

まさかの展開に驚いてしまった俺。

「なんで俺ら？」

「時の歯車があるだろ、その森には。それがどこにあるのか確かめるとついでにさ」

「…はあ…」

「…わりいポツチャマ。今日は依頼があつて…あの満月森に行かねえとなんだ」

「満月森…ってあそこか」

「行くぜ」

「おう」

外でブイゼルと合流して、満月森へ向かった。

「へえ…また親方はぶっちゃけたことをするねえ」

ブイゼルはやや呆れ気味ではあったが…。

「…」

満月森を見た瞬間、黙り込んでしまった。

「…これは…!!」

ポツチャマも俺も顔面蒼白になっていた。

森が完全に止まっている…。

葉っぱが宙に浮いたまま…。

中に入ると、殺風景にも色を亡くした木々が並び、ポケモンたちが逃げようとするポーズのまま止まっていた。

「・・・ひどい…」

「これは、もしかしてチームブライト？」

そこにいた四匹の探検隊、チームブライト。

パチリス、コリンク、プラスル、マイナン。

綺麗に動きが止まっていた。

「こいつらを外に出せばいいんだな？」

「みたいだね」

そして、外に引っ張り出して、

「あ…ありがとうございます…！」

御礼を言われた。

「いやーまさかねえ…」

「なにがあつたんですか？森の中で」

「いきなりさー…なんかねー、森がざわざわしてきたから、逃げようとしたんだけど…」

「その前に、飲み込まれちゃったんす」

「はあ…」

「親方が、時の歯車の位置確認して来いって言ってたんだけど、わかります？」

「わかるよー、御礼として連れてってあげるよ」

「ありがとうございます…！」

「ない…!？」

そのあるという場所に行ったのだが、歯車型の穴が開いているだけだ。

「盗まれたか…」

「え？」

「最近噂になってるジュプトルさ」

「ジュプトル…なんか引つかかるんだよな」

「どうかしたの？」

「いや…」

「ふーん」

そうして、もはやありえない状態になってしまった森を抜け出し、

ギルドへと戻った。

「時の齒車がなかった!？」

「はい」

「そりゃやつは盗まれたのな」

「やつぱり……」

「時の歯車がないと、森が動かないんだよな」

「ジュプトルに会ったら、奪い返すようにすべての探検隊に言うてくれ」

「はい！！」

こうして、時の歯車を知ったノゾムであった。

第十七話　ブイゼルの傷

「…時の歯車がまた一つ…ねえ」

親方は、部屋でつぶやいた。

しかし、何かひらめいた。

「もしかして…ノゾム君と何かかかわりが…？」

「どうかしました親方？」

「あ、いや…ちょっといいかいペラップ？」

「…」

ジュプトルとノゾムには、何か関係がある。

そう親方は確信した。

ノゾム君が記憶を失ったことも、人間からポケモンになってしまったことも。

ジュプトルが…関係している…！！

親方の頭脳はフル回転。

いつもはああ見えてぼけてるように見える。

でも、いざとなると親方の頭脳は活発化する。

「…ペラップ、だれにも言うなよ」

「わかってます親方」

みんなが親方を尊敬できるのは、こつという場面があるからである…。

「ノゾム―!!」

「あ、ブイゼル」

今日は基地にブイゼルが来た。

「なんでまた？」

「いやー、待ってたのに来なかったから、何かあったのかなあって……」

「そんなことはない」

「よかった……依頼は？」

「今のところはないよ……」

ふと、俺は目を止めた。

「ブイゼル……どうしたんだ？その傷」

ブイゼルの脇腹に、何やら激しい傷跡が。

「え？これ？」

「それ」

「これは……おととい、何かに襲われて……」

「何か？」

「たぶん、いつもの……ユキメノコとコロニーヤ……かな」

「そう言つのちゃんと言えよ、まあブイゼルは強いから負けないとは思っけど」

「…」

ブイゼルは、かなり微妙な顔つきになった。

「大丈夫…！？」

その瞬間、ブイゼルは突然倒れ、宙に浮いた！！

「あ…！？」

上を見上げると、冷酷な目をしたエーフィがいた。

しかし、そのままエーフィが動くと、ブイゼルも外へ！！

「ま…待て…！！」

「見失っちゃった」

「あれ？ノゾムどうかしたの？」

のんきにポツチャマが。

「ブイゼルがさ、エーフィに連れ去られちゃったの」

「え！？」

ポツチャマも真剣に探し出した。

「もっと早く言ってくれよ」

「お前が来るのがおせーの!!」

などという言い合いをしていたら、ますますわからなくなった。

「あーモーお前のせいだ!!」

「ええ!?!」

はあ…。

バイゼル、ごめん…。

その時、上空にさっきのエーフィが乗った船と…。

あれ?バイゼルがない!?

「いない」

「なんで!?!」

「…あ…!!」

エーフィの後ろから、大きな船が現れた!!

「あ…あれはなんだ!?!」

「追いかけるぞ!!」

バイゼルを救うため、走り出した…。

第十七話 飛行船を追え！！（前書き）

前回の船というのは紛れもなく空飛ぶ船＝飛行船でございます。
言い忘れてました。

第十七話 飛行船を追え!!

「待てー!!」

「ブイゼルを返せ!!」

そついうが早い、俺はまずボルテッカーで飛行船へ飛び乗った。

「ポツチャマ、地面に向かってバブル光線しろ!!」

「うん!!」

ポツチャマはバブル光線でどんどん上へあがり、飛行船に着地。

「侵入者!!」

そこにいたブルーが声を上げた。

「…あ!？」

気が付いたところには、すでに周りを囲まれてしまっていた。

「行くぞ、ポツチャマ、合わせ技だ」

「…?うん」

「お前が渦潮を出してくれりゃそれでいいから」

「オツケー!!」

ポツチャマが入口からはみ出そうなくらいの大きな渦潮を作り出した。

そして俺がそこに

「十万ボルト!!」

渦潮は電気をまとい、あやしい音を立てた。

「いつけー!!」

俺たちが離れた瞬間に、雷がバリバリツと音を立て、爆発した!!

「!？」

そこにいたブルーも巻き込み、入り口は崩壊状態に…。

「行くぜ!!」

俺はポツチャマの手を引き、ブイゼルを探しに行った。

「すごい爆発音がしたな……」

「そうですね、ダークライ様……」

その飛行船のある場所に、ブラックストーンズボスのダークライがいた。

「さて、こいつをどうしようか……」

ダークライが目をやった先には、柱にくくりつけられ、動けなくなっているブイゼルの姿があった。

「放せよ、このっ……！」

水鉄砲を放とうとしたが、ダークライに口を抑えられてしまった。

「やる気がてめえは」

「放してって言うてんだよ……！」

「ユキメノコ、こいつをこおらせる」

「はい、ボス」

そういうと、ユキメノコは冷凍ビームを繰り出し、ブイゼルのすべての動きを封じてしまった。

綺麗に凍り付いてしまい、口も目も動かせなくなってしまっていた。

（ノゾム…助けて…！！）

ブイゼルはその後、意識を失ってしまった。

・・

「始まるぞ、暴走が…」

そついうとにたりと笑い、モニターを見つめた。

「仲間が来たか…でももう無駄だろうな…」

そして、イスに深く座り込んで、ブイゼルをじっと見つめていた。

「くそ！どこにいるんだよブイゼルは！」

「…いないなあ」

こっちは二匹で虚しく探していた。

「あ…あの部屋じゃないの？」

ドアにはなぜか「コスタリカ」と書いている。

「入ってみようぜ」

なんと中には、柱にくくりつけられていてさらにこおっているブイゼルの姿が…。

「な…！？」

うす、次回、ボスと対面&バトル！！

第十七話 飛行船を追え！！（後書き）

あ、超長編の前の話になります。

第十九話 暴走

「…ブイゼル!!」

凍り付いているブイゼルを見てぎょつとして、あわてて駆け寄った俺たち。

「しっかりしろ!!…くっそー、こういう時に炎タイプがいれば…」

「…誰だお前らは!!」

「さっきの爆発の犯人と思われます!!」

「そうか…じゃあ、殺せ」

「はい」

そういうと、一匹のサザンドラが突っ込んでくる。

「負けるかぁ!!」

「いよっし、最大パワーの渦潮!!」

コマのような巨大な渦潮をサザンドラに当てた。

「十万ボ…」

しかしその時、突然まぶしい光が…。

「!？」

「始まりやがったな…」

「始まる…!？って何が!？」

「見てろ…」

光ってるのはブイゼルの体だった。

「ブイゼル!!!」

しかし、近づこうとした時に、ブイゼルの周りには小さな球がいくつも球ができて、水が出始めた。

そしてそれはブイゼルを包み込み、巨大な球となってしまった。

そしてその間、なんでか足と手全てが動かなかった。

「う…動けない!！」

何やらびりびりとした振動が、腕に伝わる。

そして、球の周りには、リング状のものができて、回転を始めた。

「水を従える力…」

ダークライがつぶやく。

「なんのために…ブイゼルを狙ってるんだ!？」

「それは、新しい未来を築くためさ…」

「…もしかして…ゴローニヤとユキメノコの仲間か!？」

「仲間ではない、ボスだ」

「ぼ…!？」

今、あいつらのボスが目の前に…!

「なんのためにブイゼルを捕まえてるのか、教える!！」

「奴の力を使えば、あれが探せると推定したからだ」

「あれ？」

「言っておく…水の玉さ」

「水の玉？」

「それがあれば、水に関するすべてのものを動かせる…でも、どうやら…」

「…?」

「…こいつの中にあるように」

「中に!？」

「たぶん、飲み込んだか、そのエネルギーを含んだ隕石が何かにでも遭遇したか…どっちかだ」

しかし、そこまで話したと同時に、突然腕にかすり傷ができた。

「なんだ!!?」

球の周りのリングが、恐ろしいスピードで回転を始めていた。

強い風が摩擦を起こす。

「…痛い…!!」

しかもそれはあまりにも強く、立っていらなくなってしまった。

「とまれブイゼル!!」

しかし、ますます暴走は激しさを増す。

「やめろ―!!」

しかし、ブイゼルが止まるはずはなかった。

そして、暴走は続いた…。

しばらくして、光が消え、黒くなっていつてしまった。

「色が…！！」

そしてなお、リングは暴走する。

「やめてよブイゼル…もうこれ以上…」

今の俺の体、ポツチャマの体は、傷だらけだった。

「…くそ…」

血が流れた。

「戻れ…いつものブイゼルに…戻ってくれよ…」

その途端に黒い球は、だんだんと明るさを取り戻していった…。

更にしばらくたつと、球は消えた。

しかし、ブイゼルの意識はなかった。

「ブイゼルを…助けなきゃ…」

ぼろぼろの体で、必死に動こうとした俺たち。

しかし、それをダークライは放っておくことはなかった。

「…シャドーボール」

冷酷に見下ろし、俺とブイゼルとポツチャマにシャドーボールを放つ。

それでも倒れなかった。

ダークライはついに俺たちの前から消えた。

そして、外に出た。

親方とペラップがトランポリンを用意していた。

そしてそれに向かって飛び降り、一命を取り留めた。

でも、ブイゼルは起き上がれなかった…。

意識がないまま…。

第二十話 希望が見えない中・・・

「親方・・・ブイゼルは大丈夫・・・？」

俺は恐る恐る聞いた。

しかし、親方は間をおいてから、静かに告げた。

「・・・まだおきないようだ・・・」

「そうですか」

そして静かに部屋を出た。

ポツチャマはブイゼルをまもれなかった自分が悪い、といって自分を責め、現在部屋に閉じこもっている。

「ノゾムくん!!」

そのとき、チームブライトがきた。

「大丈夫なの？君の仲間は・・・」

「いつ死ぬか・・・いつ起きるか分からなくて・・・」

「確かにそれはしんどいね・・・」

チームブライトは、それでもノゾムをちゃんと見て、

「ノゾム君・・・たえそつだとしても、希望を持って!!」

「・・・はい、なんか元気でした」

ノゾムはそういつてにこりと笑った。

「ありがとうございます先輩!!」

バイゼルがいる病室へと向かった。

ピッ・・・ピッ・・・ピッ・・・ピッ・・・ピッ・・・ピッ・・・
ピッ・・・ピッ・・・ピッ・・・ピッ・・・ピッ・・・ピッ・・・

ここは・・・どこだろう・・・。

一命を取り留めたブイゼル。

しかし、体のいたるところから出血しており、包帯が巻かれていた。

しかも、何があったのかまったく思い出せないのだ。

「・・・うう・・・ん・・・？」

目を覚ました。

ポツチャマが、部屋の端ですすり泣きしていた。

「・・・ポ・・・ツチャ・・・マ・・・？」

「・・・！！ブイゼル！！」

気がついたポツチャマ。

「よかったぁ・・・」

しかし、ぱつと手を離してしまった。

「どうかしたの・・・？」

「ごめん、僕たちのせいだよ・・・僕がブイゼルを守れなかったから・・・」

「ううん・・・そんなことはないよ」

「何があつたか覚えてる？」

「ううん、ぜんっぜん」

ポツチャマ野頭には包帯が巻いてあつた。

ブイゼルはそつとそこに触れた。

「ねえ・・・何があつたの・・・？」

「ブイゼルが・・・水を従える力で暴走したんだよ・・・」

「信じられない・・・僕、そんなことを・・・！？」

「事実だよ」

ポツチャマがこんなに傷だらけなのは僕のせい！？

「・・・ごめん・・・！！」

「ブイゼル・・・」

二人で抱きついた。

二人して、目から涙を流していた。

そして、そこに俺が入った。

「ブイゼル・・・」

「ノゾム!!」

「ブイゼル・・・こんなリーダーでごめん!!」

「そんなことない、いいリーダーだよ!!!この探検隊に入ってた」

「ごめんブイゼル・・・」

三人で抱き合った。

しかし、ブイゼルも俺もポツチャマもしばらく探検隊を休んだほうが言いとペラップに言われた。

チーム稲妻、しばらく休業!!

第二十話 希望が見えない中・・・（後書き）

別に執筆を止めたりはしませんのでご安心を。

第二十一話 「番外編」ブイゼルの休日（前書き）

今回はブイゼル視点で。

第二十一話 「番外編」ブイゼルの休日

「うああっ、よく寝たーっ!!」

僕は目が覚めた。

横ではノゾムとポツチャマがすーすーと寝息を立てて寝ていた。

こんな目覚めのいい日があっただろうか…。

しかし、まだこの間の暴走の傷が痛む。

しばらく休業しろって言われてるから、依頼はできない。

「イタタタ…うーん、せっかくの休みなのにもつたいないな…」

探検隊にはなかなか休みがない。

こついう日は有意義に過ごさないともつたいないのだ。

「…そうだ、せっかくだしあそこに行こっ!」

寝息を立てているノゾムたちをおいて、僕は一人どこかへ向かった。

「着いた着いた」何しようかなーっ!!」

僕がやってきたのはアクアタウン。

最近、水のアートが流行っていて、空中に水を浮かべてその中で泳ぐポケモンや、水をお手玉のように回すポケモンがたくさんいる。

もちろん、僕はそれをするつもりはなかったが、一度ぐらいは来たかったのだ。

なんとも不思議な光景。

水が丸く空中に浮かび、その中でトサキントやケイコウオが泳ぎ回る。

「すーいー!」

僕は、しばらくそれを見ていた。

「あれ？ブイゼルはどこだ？」

ノゾムたちが起きた。

「もうさすがに誘拐とかはないと思うけど…?」

「そうだ!! 見張り番してるディグダに聞けばいいんだ!!」

「ああそうだね!!」

そして見張りをしているディグダに話を聞いた。

「え? 僕らの仲間のブイゼルが通らなかつたか?」

「はいそうです」

「通ったよ、やけに楽しそうな顔だったけど」

「最近楽しいイベントあったっけ?」

「あ、アクアタウンなら今水のアート展やってるよ?」

「じゃあそこかもな、ブイゼルあり得ないってぐらい水好きだもん
な」

「行ってみようよ!!」

「…ポツチャマ、お前も実は行きたいんだろ?」

「ば…バレたかあ…」

「お前も水タイプだし、ブイゼルがいたらのついでに見てっようぜ。
こんな休日めったにないし」

「だよね!-!」

数分後、ノゾムたちが来た。

「あれ?ノゾム!-!」

「ブイゼル、やっぱここか！あーもーびっくりしちゃったじゃない！！」

「こんな休日めったにないから、せっかくだし楽しもうかなって思っ
つて」

「…だよな！！」

しばらく僕はノゾムとポツチャマと一緒にこの展示会を見て回った。

感想は…楽しかったとしか言いようがないなあ…。

第二十二話 死の谷 part 1 (前書き)

ハリー・ Potterとは違いますから。
あ、あとは今回はノゾム視点で。

第二十二話 死の谷 part 1

「ノゾムー、親方が呼んでるよ」

「ふえーい」

親方に呼ばれて部屋に入った。

「なんですか？こんな早くに…」

僕は目をこすりながらも眠さをこらえた。

「今日から依頼やっていいよ」

「はいー!!」

「みんなに行っておいて、代替怪我が治ってきたからもうしていいわよってラッキー医師が言ってたって」

「はいー!!」

そしてルンルンとしながら部屋へ。

「みんなー!! 今日から依頼再開だー!!」

「おー!!」

みんなはそれを待ち望んでいたかのように大きく返事した。

「じゃあまずは朝礼な！！」

「うん！！」

「ほんとに？」

「ほんとだよ！！」

朝礼を終え、朝ご飯を食べ、依頼を取っていざ出発！！
と思いきや……。

正面から来ていた探検隊と衝突してしまった！！

「あ……ごめんなさい！！」

「いやいや…」

ぶつかってしまったのは上級の探検隊、チームカラフルズ。

そして落ちてしまっていた依頼書を持ち、再び外へ…。

「依頼書が変わってる!!」

「え!?!」

「さっきは絶対もつと簡単な依頼だったはずなのに!!」

「…死の谷？」

「別名、悪魔の住処・・・あのカラフルズがそんなところに行こうとしてたなんて…」

「そんなにやばいのか？」

「…行くなら自殺行為だよ」

「そんなに！？」

「…でも、行かないわけにはいかないし…」

「だよなあ…やるしかないか」

「救助要求者が待ってるだろう？」

「待ってるさ、行こう」

死の谷。

そこにいたのはキノココ。

「すいません、私の仲間がそこに…」

「はあ…要はあれを助ければいいのか？」

「はい」

しかし、想像を超える恐ろしさだった…。

何とか救出完了。

「よし、じゃあ今から戻るぞ!!」

しかし…。

後ろから飛んできたエアームドが、ブイゼルをかつさらっていった!

「ブイゼル!?!」

しかも、死の谷の方へ向かっていく…。

「ま…待てっ!!」

エアームドが落とした先は崖っぷち。

もうすぐ落ちる…!!

「ブイゼルっ…!!」

滑り込みでブイゼルの方へ向かう。

しかし、ブイゼルの手は崖の端を放してしまい、ブイゼルは下へ…。

ブイゼルの手に誰の手が届くのより先に…。

「ブイゼルっ…!!」

ブイゼルは、空中をのたうちながら、闇に消えていった…。

第二十三話 死の谷 part 2

「水鉄砲!!」

そつと谷の下へ着地したブイゼル。

「きつたないなあ」

地面に落ちる骨や枯葉。

「…ん？」

依頼書に書かれていた依頼主。

「あれ…？ポケモンがいる!!」

依頼主が叫ぶ。

「はあ…そつつすけど」

「助けに来てくれたんですか!!?」

「来てただけど、落ちちゃって」

「ああ…でもあなたの仲間はきつと谷の上に?」

「どうやって依頼したんですか?」

「まだケータイが使えたからそれで依頼申請したんですけど、その

あとケータイが切れちゃって…」

「あらら…でもまあたぶん大丈夫ですよ。ノゾムたちが助けてくれるはず…」

依頼主、カラナクシ。

谷の近くを散歩していたら、エアームドに突き落とされたいらしい。

「エアームドか…さっき僕もそいつに…」

その時、後ろから…。

「…噂をすればやってくるって本当なんだな」

ブイゼルとカラナクシは、まんまとエアームドに捕まり、谷を脱出するも…。

「ブイゼルと依頼主のカラナクシが飛んでいくぞエアームドで」

「見てていいのかよこれ」

「追いかけるけどよー、なんかあの姿が…」

沈黙。

「…間抜けだなあと」

「そんなこと考えてないで追いかけてようよー!」

トゲトゲ山に…。

「あつ、背中痛い!!」

「まず足の踏み場が痛い!!」

「つかカラナクシさん、地面這うから痛いんじゃない!？」

「痛いとお腹も」

「だからもう無駄に動くのやめよう!!」

「でもまず縄にくくりつけられてる時点で…」

「絶体絶命っすね」

「へっへっへ…お前らは俺の晩御飯だぜ」

「…エアームドって肉食？」

「たぶん脅してるだけだと思います」

「そうさ…！脅してるだけだ…！」

「脅すな…！」

「…っるせ…！」

このグダグダなやり取りはいつまで続くのか！？

第二十四話 死の谷 part 3

めちゃくちゃ険しい山の表面を上る俺とポツチャマ。

「つつたく…あいつは」

「仕方ない、エアームドの気分によるでしょ」

「エアームドって肉食？」

「いやたべねーよ共食いだろ」

ポツチャマと俺は結局グダグダコントを続けてるわけで。

まあ喋りながら行けば苦にならないし。

「…なあもうタイトル変えろよ、谷じゃなくて山登りになってるぞ
！？」

「そうだそうだ—」

きつすぎてどこに突っ込んでいけばいいのかわかりません。

でももう谷じゃねーよ。

もう山だよ！！

トゲトゲ山の。

タイトル決めるときはもっと慎重に！！

一方ブイゼルたち。

「…なんか慣れてきやした」

「むしろツボ押しマッサージ的な感じで」

「でしょー？だから俺はここに住んだのよ」

結局エアームドと仲良くなりまして。

で、今もグダグダお話し中。

もうなんなのこの小説、って思った方!!

思っています!!

そこへ…。

「おいおい、何してんだよ」

「あ!! あなたは…有名探検家の!!」

「有名なの? いやー照れるわーって…自分で言わねえよ!!」

「バクフーンのフックさま!!」

「うんそうありがとう」

「でもなんでここに?」

「いやねー、こいつと友達だったんで山に連れてこられちゃって…でにぎやかだなって思ってみたらなんかいるなーって思って、ちよっと来てみましたけど邪魔っすか?」

「いえいえ」

「わー感激です!! 僕探検家なんです!!」

「おおゝ…ふ」

「チーム稲妻です!!」

「お？さてはポツチャマがいる？」

「そうですね…知り合いですか？」

「いやな、なんかそいつが小っちゃい時にそいつが住んでる村に行つたんだよ。であつたんだ。で、探検隊作るとか言つてたなーって。そんで最近の新聞に結構載ってたから、ああきつとこいつ作つたんだなーって」

「おおゝ…ふ」

まあそんなグダグダで新キャラまで登場したことを知らない俺たちであつた…。

第二十五話 死の谷 完結編

「…おい作者！！タイトル変えろ！！」

俺たちはいまだに、山を登っていた。

さっきのは俺の心の叫びである。

もう谷じゃねーし！！山だし！！

というわけで登っていくのだが…。

どうしても、いやな予感がする。

頑張つて登つたのにブイゼルたちはへらへらしてるといふイメージしか頭がない。

「ノゾム？どうしたの？？」

「なんかさー…ブイゼルとカラナクシが無事なような気がする」

「え！？まじ！？」

「むしろへらへらして喋ってんじゃないのかと」

「え…あ…あり得るね」

「だろ？」

「うんうん」

「で、エアームドと仲良くなつてたりして」

「おお…ふ」

「そんで仲間に…する？」

「え！？いやいやいやだし」

「だからいやな予感がするんだよ…ブイゼルは平和主義者だし」

「完全にヒーローだろそれ」

「だからなー…もう降りてこないんじゃないかと」

「いやいやいやいやそれはない」

「…大丈夫かなあ…？」

しばらくして山頂に到着！！

…おいおい。

おいおいおいおいおい。

予想通りだろこれ!!

「あ、ノゾムー？僕無事だよ」

「やっぱりな」

「え？エアームドさんは優しいよ」

「いやいや…あの…」

「なに？仲間にするのって言いたいのか？」

「…え…？」

「いやいやするわけじゃないでしょ、僕らはずっとこのままでいいよ」

「ハア…」

「なに？仲間にしたかったのか？」

「…いや、なんでもありません」

「…そ」

ブイゼルはたいそう楽しかったようだ。

しかし俺たちがどんな気持ちで登ってきたのかわかってんのか…？

…まあいいや。

「降りるぞ」

「ふえーい、あ、じゃあねエアームドさん!!」

「お元気でー!!」

…なんなんだこの状況!!

下山後。

カラナクシと別れ、道を歩いていたら…。

「どわぁい!!」

目の前に何かがぶつかってきた!!

「なんだ!?!」

ブイゼルもポツチャマもびっくりする。

「…勝負してください」

そのポケモン…ナエトルは言った。

「え?なんで!?!」

「いいからバトルをしてください」

「え!?!」

俺を含め全員ビクリした。

「…あ、いいぜ」

思わず返答してしまった俺。

「じゃあお願いします」

この妙な敬語を使ってくるナエトルと、どうバトルするのか!?

続く!!

第二十五話 死の谷 完結編（後書き）

あの悪役の代名詞エアームドさんが、まさかあんなほのぼのした人になるなんて…。

知るかーっ！！

ノゾム

「今回は、敬語バカのナエトルとバトルだぜ！！」

第二十六話 VS ナエトル！！フイゼルの奇策！！

敬語バカのナエトルとバトルすることになった俺たち。

「誰が行く？」

「じゃあ僕が行くよ」

ポツチャマがナエトルの前に立つ。

「不利なのに…まあいいでしょう、先攻はそちらで」

「オツケー！！行くぞー、渦潮！！」

いきなり巨大な渦潮をぶちかますポツチャマ。

「おお…でも」

ナエトルはそうつぶやいた。

そして渦潮が来る寸前。

ナエトルがいる場所に渦潮到達！！

しかし…。

「よっしゃー！！閉じ込めた…」

「葉っぱカッター」

「!？」

後ろから葉っぱカッターを食らい、戦闘不能に…。

「なんで!？」

「私の自慢の足を甘く見ないでくださいよ」

「…そっか、足が速いのか…」

ブイゼルがつぶやく。

「ノゾム、時間稼ぎに戦つていて」

「ええ!？」

「僕が今からあの敬語バカを倒す方法を考えるから」

「ハア…うん、わかった」

ホントは俺がその倒す方法をやりたかったけど、ブイゼルの考えは…。

「十万ボルト!!」

しかしナエトルは交わしてしまう。

「電光石火!!!」

一気にナエトルに接近し、

「アイアンテール!!」

その一発しか当たらなかった。

「やりますね…でも本当に倒すのはあのポケモンでしょう」

ブイゼルをにらむナエトル。

「そうさ…俺は時間稼ぎだから、頑張らなきゃなんだよ!!」

そして俺はひたすら時間稼ぎをしていた。

ポツチャマは伸びて倒れていた。

ブイゼルは頭を懸命に回し、作戦を考えていた。

「…あ！！分かった」

ブイゼルがつぶやいた。

「終わりか？」

「うん！！ありがとう」

ブイゼルがナエトルの前に立つ。

「…勝てる？」

「勝ちたいです」

そして火ぶたは切って落とされた。

「アクアジェット！！」

ブイゼルが攻めていく。

「無駄ですよ…」

しかし、なぜか命中！！

「む！？」

「ソニックブーム」

はたまた命中。

「なんで…!?!」

ナエトルも驚く。

でも水タイプの技はあんまり効いていない。

「でも水タイプのあなたが、どうやって草タイプを倒すというのです?」

「奇跡だって起こるさ」

ブイゼルはとことん攻めていく…。

「あ…ブイゼルもしかして!?!」

俺は気づいた。

ブイゼルのカバンの中に…。

「ヨクアタール」が入っていたことを。

それを、俺がバトルで時間稼ぎしてる間に飲んだんだ!?!

そしてとどめ…。

「冷凍パンチ!?!」

ブイゼルのこの一撃は、草タイプには効果バツグン。

ナエトルは倒れた。

「よっしゃー!!」

というわけで、バトル終了。

後々このナエトルは大きな役割を果たすことになる…。

第二十七話 ギルドの夏祭り！！流れ星に込める願い！！（前編）

「おはようございまーっすー！！」

「おはようございまーす」

朝から朝礼を進める俺たち。

前でペラップが大声であいさつの練習中。

「というわけで、今日は夏祭りだから、今から設営を始めるぞっ！
！」

「…夏祭り？」 ↑ 初耳だった俺

「…そんなのあるの？」 ↑ 知ってそうで知らなかったブイゼル

「あ、言い忘れてた。てへ」 ↑ 知ってたのに言い忘れたバカ

「「何やってんじゃボケー！！」」

というわけで俺とブイゼルの二大攻撃を受けて後ろによるめいたボツチャマ。

「…毎年このギルドではお祭りをやるんだよ！！感謝祭だよ感謝祭！！
！！そんで、ギルドメンバーが出店を一日で考えて、お客さんたちに
思いっきり楽しんでもらうっていう感謝祭なんだ！！」

「…ふぉえ〜…」

ブイゼルも俺も感心する。

「…なんにする？出店」

「…もうそこはやっぱり焼き鳥屋で」

「おでんは？」

「花火は？」

「ヨーヨー釣り！！」

「あ！！それだ！！！！」

というわけでチーム稲妻の出店はヨーヨー釣りに決定。

「…でも大変だね…ほかのチームはどうだろ？」

「聞いてくる！！」

まず向かったのはチームカラフルズ。

「どうしたの？」

リーダーのブースター、フランがいう。

「えっと、出店はどうするのかなあって…」

「綿あめ屋さんかな…今もめてるけど」

そこでは、シャワーズとサンダースとリーフィアがもめていた。

「ぜえったい綿あめよー!!」

「おでんだよー!!」

「いいえ!!タイ焼き屋さんよ!」

「こんな時期にタイ焼き焼いてどうするんだ!!それは冬だろ!!」

「それだったら、おでんだってそうじゃないの!!」

「……とまあこんな感じで、たぶん綿あめだね」

「ありがとうございました」

俺はその場を立ち去った。

「あ、ブライトの皆さんはどうだろ?」

「あ、ノゾム君!!ちょうしどーお?」

「…はい、まずまずです。えー…出店は何になったんですか?」

「お面やさんよー!!」

「お面やさん?」

「ほら、お祭りといえばお面を頭の後ろによくくっつけて歩き回っ

てるポケモンいるじゃないの!!」

「そうですねえ」

「だから、その雰囲気を出すためにもね…」

「すごいですねえ!!」

「ノゾム君たちは？」

「ヨーヨーです」

「いいじゃんいいじゃん!!休憩なったらヨーヨー釣るから覚悟しときなさいよ!!」

「望むところです!!」

というわけで聞き込み完了。

「みんなレベル高いけど、でも頑張ろうぜ!!」

「うん…あ、ヨーヨーは？」

「きつと売ってるさ!!」

カクレオン商店でヨーヨー用の風船を買い、ふくらましていく。

中に水を入れ、大きなプールに浮かべていく。

「よし、大体準備かんりよ……」

「こんにちは」

「！？あ！！」

振り返ったら、昨日のナエトルが……！

「お祭りなんですか？」

「うん、お祭りの」

「手伝いましょうか？」

「…うん、手伝って」

さて、夏祭りは成功するのか！？

第二十八話 ギルドの夏祭り！！流れ星に込める願い！！（後編）

「ナエトルが手伝ってくれるって」

ナエトルがぺこりと頭を下げた。

「あ、じゃあよろしく」

ポツチャマも軽く挨拶する。

「あ、もうすぐ始まるぜ！！」

「おお…ほんとだ」

ギルドの門の前には、たくさんの人が来ていた。

「じゃ、やるぜ」

「ゆっくーりはいつてねー！！」

ペラップの声が出た。

そして門は開かれ、たくさんの人が押し寄せた。

「おお…」

「ヨーヨーつるつよー！！」

「うん」

早速、小さい子たちがヨーヨーを釣りに来た。

そして、ヨーヨーをつらせていると…。

「あ、ブイゼル君にポツチャマじゃないか!!」

「…フックさん!？」

そこにいたのは、まぎれもなくバクフーンのフックだった。

しかし、俺のことは知らないで、名前を呼んでくれなかった。

「うわーうわー久しぶりですねフック先輩!」

「大きくなったなあーポツチャマ!!」

「…あのお…」

俺は声をかけようとした。

「お？君は…」

「ノゾムです。ポツチャマと組んでチーム稲妻を…」

「オーオー初めましてー。俺はフックだ!!」

「よろしくお願いします」

絶対いい人だこの人は。

そして祭りは大盛況。

盛り上がって盛り上がって…。

夜。

「もうすぐ花火大会だよ!!」

「おお…もうそんな時間か」

しかし空を見上げると、雲が多くなっていた。

「…大丈夫かなあ…」

しかし、やがてぽつぽつと雨が降り出して…。

「!？」

「花火はどうなるんだ…!？」

「えーっ!？」

会場もざわめく。

「花火大会は中止!!みなさん速やかに帰ってください!!」

ペラップの呼びかけにより、客は帰り、店も閉まっていく。

しかも、雨は強まるばかりで…。

「そんな…」

がっかりするポツチャマ。

どうやら、相当楽しみにしていたらしい。

「…もう、あきらめようぜ…」

俺の声により、ポツチャマも片づけを始めた。

空はもう真っ暗で、稲妻が走っていた…。

数日後。

まだへこんでいるポツチャマを見て、ブイゼルと俺は心配する。

「花火、相当楽しみにしてたんだね……」

「残念だよな……あ！」

俺はいいことを思い付いた。

ポツチャマが笑顔になれる……。

夜。

「おいポツチャマ、こっち来い!!」

「…?うん」

ポツチャマは部屋から出て、ギルドの外に出た。

「…!!」

ポツチャマは、目の前に並んでいる手持ち花火を見た。

「ポツチャマ、やろうぜ!!空には上がらないけど…」

「花火は花火さ!!」

しかも、俺たちだけでなく、チームブライトやチームカラフルズ、さらには駆けつけたフックさんまで。

「ううつ…みんな、ありがとう!!」

「これでちよつとは元気になるよね」

バイゼルがささやいた。

「ああ…もちろん」

俺もささやき返した。

そこに親方が。

「僕もやりたいなあ……」

「親方!？」

「この間花火できなかったからね、やりたいなー」

「やらせてもらっていい?でいいんじゃないですか?」

どつと大歓声。

そして花火をしていた。

線香花火、スパーク花火。

たくさんの花火を見て、ポツチャマはだんだん笑顔を取り戻していった。

楽しいお祭りは、これにて幕を閉じる。

第二十九話 ソロアーク登場!!

「おはようポツチャマ!!」

「おはよ…」

眠そうに眼をこするポツチャマ。

いつも通りだ。

「今日も頑張ろうぜ!!」

「うん!!」

花火の一件でへこんでたポツチャマ。

今はもう復活しているようだ。

「よし、朝礼行くか!!」

朝礼と朝食を終え、依頼を受け取り、外へ。

そこには、バイゼルが待ってた。

「おはよう」

いつも通り、笑顔であいさつしてくれた。

「じゃあいこっか…今日はフレンドシティに行くんだけど」

バイゼルの顔が輝いた。

「…どうかしたか？」

「僕の故郷だよ!!」

「マジ!?!」

ポツチャマも俺もびっくりした。

「じゃあ行くか」

「うん!!」

そしてトレジャータウンを出発。

歩いているブイゼルの横顔はルンルンしていた。

数十分後、フレンドシティ。

「お母さんに会ってくるー」

「ブイゼル、俺も行くー!!」

「依頼はなんだっけ？」

「え…まあ後回してもいいけど」

そしてブイゼルの家の前。

「おかあさん…！」

「…ブイゼル！？どこ行ってたのよあんたは…！」

「ごめんなさい…」

「…もしかしてまた旅行ってたの？」

「違うよ！探検隊になったんだ…！」

「そうなの…？」

ブイゼルの母はびっくりしていた。

「じゃあ後ろにいるのは仲間の皆さん？」

「そうだよ」

「ああもうお世話になってますうちの子が…」

「いえいえこっちの方が…」

なんておばさん話を繰り広げて…。

「息子の力の正体ってなんなの？」

「えっと、水を従える力だそうです」

「へえ……」

「へえ……ってなんだよお」

「迷惑かけてない？」

「いえいえとんでもない」

「そう。よかった」

「あ、じゃあ僕ほかの友達にも会ってくる!!」

「いつてらっしゃい」

「ドリュウズー？いないのー？」

たまたまこの時間は、ドリュウズが不在だった。

「…じゃあ、あいつに会いに行こうー！」

ブイゼルは森の奥へ…。

「ゾロアーク！！出てきてよー！！僕だよ、ブイゼルだよ！！」

「…ああ、ブイゼル？」

『ブイゼルの旅〜輝く記憶〜』を見ていれば分かると思うが、あの

ゾロアが進化したものだ。

「久しぶり！！エモンガは？」

「今はいないけど…なんでここに？お前、連行されてっちゃったじやんか」

「ああ…そうなんだけど、ノゾムっていうピカチュウとポッチャマに助けてもらったから、今は僕探検隊として生きてるよ」

「そうなんだあ…じゃあ依頼できたのか？」

「そうそう。懐かしいなあ…」

「探検家といえば、やっぱりフックさんだよ」

「そうそう。この間、当人に会っちゃったよ」

「いいなあ…」

「ゾロアークは今ジムのリーダーでしょ？仕事はないの??」

「ああ、そうなんだけど、今は。。。がやってるよ」↑まだ未登場なので。。。です（BY作者）

「へー。上手くやってくれと」「いや、今の俺は休憩中だ。もうそろそろ行かなきゃ」

「そうかあ。じゃ、頑張ってねゾロアーク!!」

「お前もな」

そう言って、ゾロアークと別れた。

バイセルの、久しぶりすぎる再会であった。

そして依頼を終え…

チーム稲妻はギルドへと帰った。

ブイゼルにとって、再会はとても嬉しいものだった。

第三十話 「番外編」秘密基地計画

「今日は寝坊しちゃったな」

「ほんとだよ」

「どうするどうするう？」

チーム稲妻はざわざわめく。

「あ、秘密基地作らない？」

「おお……ふ」

「いいねえ！ーやろつやろつ」

さてまあとりあえず秘密基地大作戦開始。

「どこに作る？」

「ギルドの裏の森」

「どんな感じで作る？」

「イメージはロボット」

「木の上？下？」

「やっぱりそこは上でしょ」

「大きさは？」

「ポケモンが十匹入るぐらい」

「ざいりょうは？」

「木」

「不足は？」

「ないぜ」

「じゃあやろう！」

というわけで、秘密基地大作戦実行開始…のはずが…。

「よし、木も集めたしやるぞ!!」

ブイゼルも参加して大きな秘密基地を作る上で大事な罠を作るために穴を掘ったら…。

ゴツン。

「？」

なんと、宝箱発掘!!

「おお!!!!」

「すげー!!!!」

しかも鍵はかかっていなかったなので開けてみると…。

たくさんの手紙が。

「……これ誰の字？」

「え！？僕そんなの書いた覚えなし…あゝ！！」

ポツチャマの顔が顔面蒼白になる。

「…何？」

「それ読まないでー！！」

なんと、それは…

フックにもらった、大事な手紙だった。

「フックさん？」

「うん。そうなんだ。結構手紙のやり取りしてたんだ。」

「へえ…」

そこに…。

「よっ」

「わっ！？」

「フックさん！！」

「よお。何やってんのかと思った…おい、それ俺の手紙だぞ
！！」

「ですよね？」

「…面白いなあ…なんで発掘したんだ？俺相当深く埋めたのに」

「秘密基地を作ろうと思って、それで、わなを仕掛けようとしたら…」

「なるほどね…」

結局、チーム稲妻はあんなだけ秘密基地に期待を抱いていたのに、作らなかったとさ。

第三十一話 サイコシティの反乱

「ふぉーい……」

ギルドから出て、依頼先であるサイコシティへと向かっていく俺たち。

どうやらポケモンたちが混乱して、町が崩壊しているという。

ちなみに今日はカラフルズも同行している。

「ノゾム君…この間は大丈夫だった？」

「え？」

「ほら、死の谷。依頼書が入れ替わっちゃったじゃん」

「いえ、全然……！」

「そう？ならよかった」

「あの谷は下手したら死んじゃうもんな」

「怖いじゃないですか、そんなこと言わないでください」

「今日のランクはAだ、嚴重にいかないとダメだよ」

サンダースが警告する。

「死の谷よりもレベルが高い、町の崩壊を止めるなんて事は簡単じゃない」

「そうなんですか？」

ポツチャマが驚く。

「…サイコシティか…やばいわねあれは」

「リーダーは？」

「ミュウツー。あの町のボスよ」

「…！？」

ブイゼルが目を丸くした。

「まさか…あの…！？」

「なんだブイゼル、聞いたことあるのか？」

「僕がまだ10歳の時…友達を助けるために戦ったんだ…封印したと思ってただけ…」

「その封印が解かれたのか」

「…あゝやっぱりあの封印は弱かったかなあ」

「???まったくわからないな」

分からない人は輝く記憶をどうぞ。

「おい、PRすんなー!!」

サイコシティ。

ポケモンたちが暴れ回り、ビルはめっちゃめっちゃ。

ポケモンたちがごった返し、騒がしい。

「…これは確かにAランクだね」

「…あれは…」

上から、俺たちを見下ろしているのは…。

「…ミュウツー…」

ブイゼルは青ざめていう。

ミュウツーはブイゼルを見るなり…

「サイコキネシス」

いきなりサイコキネシスを使いだした！！

「わっ！？」

ブイゼルの体が宙に浮く。

横からは最近出てきたエーフィーが。

「…放せよブイゼルを！！」

「…」

なおも冷酷に見下ろす。

そしてブイゼルをあらゆる所へ振り回し、いろんなところにぶつけた！！

「!？」

「ブイゼル!!」

なおもブイゼルはぶつけられていく。

「やつ…やめろ——!!」

俺は走りだした!!

そして…。

地面に十万ボルトを放ち、宙に浮いて、ミュウツィのところまで行った。

「ブイゼルを放せ、ミュウツィ!!」

そして上につくなり、

「ぼ…ボルテッカー!!」

まだ未完成だった。

でも、今ならいける!!

そして俺はミュウツーに接近、そしてボルテッカーができた！！

そのまま俺はミュウツーに激突し、サイコキネシスを破った。

「ハアっ……」

しかし体力を削るため、俺はその場に崩れ落ちた。

でも、ミュウツーは立っていた。

ブイゼルは、ぼろぼろの体になりながらも、ミュウツーをにらんだ。

そしてみんなは、呆然と見ていた。

次回、サイコシティの反乱を止めるべく、ノゾム達とサイコシティの混乱した勢力が激突する！！

第三十二話 止まらない反乱…

俺たちは、サイコシティの反乱を止めるべく、戦っていた。

目の前に倒れてゆく反乱を起こしたポケモンたち。

それを平然と見ていられない俺たち。

つまり、これはこのサイコシティの政府に従っているのだ。

政府によって苦しんでいるポケモンたちがいるのに、俺たちはこの政府に従っているのだろうか。

そう考えると、すべてを放り出してどこかに行きたいと思う。

そんなの嫌だし…。

ポケモンたちがかわいそうなだけだ。

そんな争いに参加したくない…。

ブイゼルの瞳は、悲しみに満ちていた。

自分たちが倒していったポケモン。

それなのに。

倒さないといけない相手で…。

倒したなくても倒すことしかできない俺たちは…。

もう、いやだ…。

戦いたくない…。

「…ノゾム、この町…政府のせいで、こんな反乱がおこってるんだよね？」

「そうだろうな…反乱軍が…いるならそうだろうな」

「もうこんな戦いしたくないよ…見てられないよ…これ以上…ポケモンを傷つけたくない!!」

「俺も同じだけど…もういやなんだ…反乱を起こしたもとは政府にあるのに政府に従ってる俺たちはなんなんだよ!!」

「…これ以上…!」

俺は、反乱軍の前に立った。

「反乱は…起こさないでくれ!!」

大声で、そういった。

「俺たちはこの反乱と無関係なのに…政府に従ってるけど…でも、本当は…本当は…!!」

「政府は…もう朽ち果てています」

一匹のキリンリキが前に出た。

「なのに、ずっとこびりついて、政治を進めようとするんです」

「…」

「それに、政府の政治の進め方は…！！私たちにとって、不平等なんです…！！」

「…！！」

「だから…不平等はいやなんです！政府ばかり楽してる…そんな嫌なんです…！！」

キリンリキは泣き叫びながら言う。

「そうだそうだ…！！」

周りのみんなが言う。

フランは、その様子をじっと見ていた。

「こんな街中で氾濫起こしてないで、そこは政府に押しかけろよ」

「…あ」

「その手があったか…！！」

「今気づいたのか…！！」

フランが突っ込む。

「俺たちはただの探検隊さ。でも…この町が壊れていく様子を見ていたら…俺だって泣いちゃうし…」

「こんなに苦しい争いをするなら…もっと政府に責めるのが普通よ…!!」

シャワーズが言う。

「そんな政権、裁判に出せばイチコロだぜ!!」

サンダースも言う。

「だから、これ以上争わないで」

優しくリーフィアが言う。

「反乱は…終わりだ!!」

ミユウツーは、その様子をじっと見ていたが、どこかへ去った。

そしてその氾濫とのぶつかり合いから数日後。

ギルドに戻ってきていた俺たちは、親方に呼び出された。

「なんですか？」

「サイコシティが…政権崩壊したって。次にはキンリキが政治を取るってさ」

「ほんとに!？」

サイコシティの反乱は…おさまったようだった。

俺もブイゼルも、みんなが笑顔になった、その瞬間があった。

新聞には、町民の笑顔があったのだった。

第三十二話 止まらない反乱…。(後書き)

重い話!!

第三十三話 フックの涙…みんなの思い出の場所！！（前編）

「今日の依頼、フック先輩とですか？」

「そうなんだよ…フックがさ、一緒にやりたいと言っててね…そんな、やる？」

「やらないわけじゃないですか」

「そ。じゃ、フックに言っとく」

今日はなんとフックさんと一緒に依頼をすることになった。

彼の働きぶりを見るのもいい勉強になる。

なんたって、元探検家だ。

…でも、なんでだろう…？

疑問に思う俺。

今から始まる物語は、俺たちとフックさんの、悲しみでありそして
勇気をもたらえる、小さな物語である――。

「来たかポツチャマ!!あとノゾム君とブイゼル」

「僕たちついでですか!？」

「いやいや…ごめんねえ、ポツチャマしか印象に残らないからつい」

「なんですかそれ…」

「まあいいじゃないの、行こうじゃないか!」

…このハイテンションには付いていけそうもないな。

フックさんはご機嫌そうだ。

しかし…今日はどこに行くのかな？

その知らせを受けずにきたもんだから、どうしようかと…。

「あ、今日はきらめきの森に行くぜ」

「あ、はい」

そついうわけで出発したわけで。

「ポツチャマ…きらめきの森って？」

「宝石がたくさん埋まってるんだ。本当にきれいだし…宝箱も山のようにあるよ。」

「すごいな」

「…でもね…最近は…」

ポツチャマが言いかけた。

フックさんが火炎放射を空に向かって噴き出した。

空には、ヤミカラスが飛んでいた。

「…どうしたんですか？」

「…不吉な予感がしてならないんだ…」

「え？」

「きらめきの森に…何かが…!!」

「…」

バイゼルは黙り込んだ。

ポツチャマは、森の方角を見た。

フックさんは、絶望していた。

俺は、状況がよくわからなかった。

そして、今、フックさんには何が…？

「…これは…」

フックさんの予想通り、すべてが悲しみに暮れていた。

暗い森。

宝石の埋まった岩も、輝きを失っている。

そして…時間が止まっている。

「…なんなんだこれは…」

「時の歯車かな…？」

フックさんが頭を抱えて座り込んだ。

「…やっぱり…!!」

「え？」

その時、俺の頭が急に重くなって…。

「マッグー、遊ぼうよ!!」

「ああいいぜブレーン!!」

二匹のポケモンが見える。

もしかして、頭の中に見えるあのポケモンは…マグマラシ…フックさん？

そしてもう一匹はリザード。

多分、フックさんの友達なのだろう。

二匹ははしゃぎまわっていた。

そしてしばらくすると、小さな箱のようなものを取り出し、そこにたくさん、宝石を突っ込んでいた。

「ブレーン…」

ここまでフックさんが言いかけた時、俺の頭が軽くなり…。

「…大丈夫ノゾム？」

「うん…でもなんか、変な夢が…」

「どんな夢？」

「マグマラシと…リザードが遊んでたんだ…。」

フックさんがぴくつと動いた。

「もしかして…そのリザードって…」

「俺の…友達さ」

しみりと、フックさんがつぶやいた。

「……あれは……20年前ぐらいだったかな……」

フックさんの壮絶な過去…。

中編に続く!!

第三十三話 フックの涙…みんなの思い出の場所!! (前編) (後書き)

もうフックさんレギュラーですね(汗)

第三十四話 フックの涙…みんなの思い出の場所！！（中編）

「おい、マッグー！！あそぼうぜ！！」

ブレーンがフック（幼名マッグ）を呼ぶ。

「ああ、今いく！」

すぐにマッグが家を出る。

「今日は何して遊ぶんだ？」

「へへ…もちろん、きらめきの森だよ」

「またかよ…でもいいぜ！！行こう」

そして、きらめきの森に行つては、宝石などのキレイなものを集めた。

これは、実は…。

「まあ、くれるの？ありがとう!!」

「ああ!!」

ここはポケモン病院。

ここに入院している女友達、アチャモのアーチに届けに来たのだ。

「いいなあ…私も早く退院して、外で宝石集めたいなあ…」

「すぐ治るさ!」

彼女は、最近になって病気の症状が現れ、入院したのだ。

まだ何の病気かはわからないらしいので、検査中だそうだ。

「…いい天気ね」

アーチが外を見ながらつぶやく。

「あ、じゃあ俺たちもう帰るな」

「あらそう…じゃあね!」

アーチは手を振り、マッグたちは出て行った。

「…お前、うそだろ？」

「ほんとだよ…」

「お前…引つ越すなんて冗談じゃないだろ！？」

ある日。

マッグとブレーンは喧嘩していた。

なぜなら・・・。

ブレインが引っ越すというのだ。

毎日遊んでいた友達が…。

いきなりいなくなること、遠くに行ってしまうことを恐れて…。

「冗談じゃないよ…！！僕は…。僕だって引っ越したくないけどさ…！」

「…残れないのか？」

「ううん…だめだって…。」

「…そんな…」

そして、この日もいい天気だった。

マッグはすぐポケモン病院へ向かった。

「アーチ…ブレイン、引っ越すんだとよ」

「え…？」

アーチが表情を強張らせた。

「…ブレインは、引っ越すんだ…！！！」

「…うそでしょ?」

「ほんとらしいぜ…もう決まってるんだとさ」

「…まっぐはどうおもってるの?」

「ばかばかしい…でも、もし残りが少ないんだったら…思い出づくりをしたい」

「…それはいい考えね…私、今日ちよつとした手術なの。命に別状はないけど…。でも、もしそれで治ったら一緒に行くわ」

「…そんな簡単に行っているのか?」

「明日は外出オツケーよ」

「…そうなの?じゃあ明日一緒に行こうよ!」

明日はアーチも一緒に行ける。

ブレーンも喜ぶだろう。

「じゃあ、また明日な」

マッグは静かに退室した。

翌日。

「ブレン、来いよ!!」

朝から、マッグが叫ぶ。

「今いくけど…どうしたの？そんなにあわてて」

「今日は…アーチと一緒にきらめきの森に行くんだ」

「そうなの？やったね♪」

「お前の思い出づくりのためにな…」

「…そっか、ごめんねわざわざ」

「いやいや…俺もお前と思い出作りたいんだ」

「もちろん」

そこに、車いすに乗ってやってきたアーチが。

「遅れてごめん…！」

「いやいや…外に出たのか」

「えエ、出ないといけないじゃないの…！」

飛び切りの笑顔で、アーチは答えた。

三人は、きらめきの森へと向かった。

「…キレイ…！」

アーチが目にした美しい森。

「だろ？それでも俺たちはゴミ拾いしてるんだぜ」

「…本当？」

「ああ…！」

そして、俺は二人をお気に入りの場所に連れて行った。

きらめきの森は、谷の端にある。

だから、雄大な大自然が見える崖の上があった。

「見るよ…ここは俺のお気に入り場所さ」

「あるんだつたらもつと早く教えてよ」

「俺だって…ブレーンが引越すって言ってたから、プレゼントになるかなって」

「なるよ…これなら十分…!!」

ブレーンは、この広い大自然を眺めていた。

ブレーンの頬には、涙が伝った。

「…へへ、悪いねえ…グズ、思わず涙が出てきちゃった」

「…いい天気ねえ…ほんとに…」

炎タイプ三匹で、タイムカプセルを埋めたりもした。

鬼ごっこもした。

ゴミ拾い大会もした。

いろいろやった。

全ては、一日しか外に出れないアーチと、思い出を作るブレーンのため。

そして数日後。

ブレインは引っ越し、アーチもいつも通りの病院生活に戻った。

マッグは一人になった。

それでも、彼は生き続け、大きくなり、探検家へとなった。
でも、アーチは…。

今は病気も治り、普通の生活を送っている。

そしてブレーンは…。

もう、どこにいるのかもわからない。

フックにとって、かけがえのない友達。

いなくなってしまったけど…。

今はきつと、どこかで元気にやっていると信じている…。

次回、現代に戻ります。

第三十五話 フックの涙…みんなの思い出の場所！！（後編）

「フックさん…そんなことがあったんですね」

「あつたんだよ…もう自分がこんな過去を持っているなんてさ…」

フックは過去のことを話し終え、しみじみとした表情で遠い空を見つめた。

「でもさ…生きてるはずなんだ、ブレーンは…」

「アーチさんもきつと願ってます」

「俺らはいつか再会できるのかなってずっと思ってたけど…ブレーンの安否もわかんないからさ…」

「…」

静かに風が吹く。

爽やかにみんなの横を通り過ぎていく。

沈黙が続く。

それを破ったのはブイゼルだった。

「僕も…大切な友達がいます。でも、もしもその友達が死んだら…もしくは、僕が死んでも、友情って永遠なんでしょうか…」

バイゼルはうつすらと疑問形を残した。

「…そうだろうな、もしもその友達が死んでも、友情は途絶えないさ」

にっこりとほほ笑んだフックさん。

でも、そんなフックさんの見ている景色には、動きがなかった。

空の雲が流れ、風が吹くだけだ。

葉っぱも、ポケモンたちも、宙に浮いたまま止まってしまっていた。

全ては時の歯車なのだ。

そのせいで、時間が止まってしまったのだ。

きっとジュプトルだろう。

しかしノゾムは、ジュプトルについてどうしても引っかかる場所があった。

…なんでだろう…？

一方、きらめきの森北西部。

「久しぶりね、ブレーン」

「元気そうで何よりだ、アーチ」

「二匹のポケモン…ワカシャモとリザードンがいた。」

「大きくなっ たわね」

「ちいさくなっ たなw」

「しつれいよw」

「行こうか、思い出の場所」

「時間が止まってるわ」

「…またあの景色を見たいんだ」

「マッグもいればよかったのにね…」

「そうだな」

そして二人は歩き始めた。

「そう言えばフックさん、フックさんのお気に入りの景色が見えるところってどこに？」

「ああ… 見せるつもりだったんだよな。ついて来い」

フックさんが歩き出したので、後を追って走った。

そして谷。

「キレイ…何年たっても色あせない美しさね」

「本当だ」

ブレーンとアーチは、もうすでにこの地に来ていた。

「ほら、ここだ…よ…!!?」

フックもチーム稲妻とともに歩いてきたのだが…。

「…アーチ?ブレーン…??」

「もしかして、マッグ?」

「…お…おま…お前らあ…!!」

「マッグー!!」

「俺フックに名前変えたんだけどー!!」

ブレーンとフックは抱きつきあった。

「生きてたのか!？」

「しんでたほうがおかしいよお」

「…アーチも…!！」

「久しぶりね…フック!！」

「ちょっとここ俺らKYだろ?ちょっとあっち行こつぜ」

俺はポツチャマに耳打ちした。

ポツチャマはこくりとうなずき、

「ブイゼル、行こつ」

そして、俺らはギルドへと戻っていった。

友情は永遠に…。

第三十五話 フックの涙…みんなの思い出の場所!!（後編）（後書き）

ノゾム

「最終回かよこの上の文章!!」

いいえ。

でもフックの涙編完結です。

第三十六話 ドラッグ・ハプニングー！（１）

「あゝっ、寝坊したー！！」

朝から俺は大絶叫。

何故なら、発言した通り寝坊したからだ。

「というわけで、今日は依頼なしということだ」

「久々の休日となるわけで…」

「買い込み行こう！！」

「わかったけどさ…ブイゼルどうするの？交差点で待ってんじゃねーの？」

「一緒に行くに決まってるでしょ」

「うん」

そして買い物に行くために、貯金箱からポケを出して、ギルドを出発！！

そのころ、ブイゼルは…。

「来ないなあ… 1時間は待ってると思うんだけど」

まるでデートで待たされた彼女の状態だ。

男ですが。

その時…。

後ろから、腕としっぽを誰かに掴まれた!!

「!?!? 放してよ!!」

今、まだ開店前のトレジャータウン。

静かで、人通りも少ない。

そして誰かが、口の中に薬を放り込んだ！！

「！！苦っ…あれ…」

何か…体が…。

動かない！？

「僕の体に…なにした…??」

「効果は切れにくい。軽く1週間は続く」

「はぁ！？」

「意識はあるまま、体が言うことを聞かない薬さあ…力も技も使えねえ」

「…くっ…」

つまり、今のブイゼルはケータイをつかめない…。

一円玉ももてない体へとなってしまったのである。

「…あばよお、チーム稲妻戦闘員、ブイゼル」

「…！？」

何で僕のこと知って…。

だめだ、力が入らない…！！

「おーいブイゼルう、そこで座ってねえで…」

「おはようブイゼル、どうしたの？」

「…実はさ…さっき、知らないやつらに薬を飲まされて…力が…入らないんだ…！！ どうしよう…元に戻れなかったら…」

「なんだと？薬を入れたやつらはどこにいる？」

「…いなくなっちゃった…」

「…ま、安心しろ！！ボクたちが捕まえるから」

「ダメ…」

「え？」

「それだけはダメ…！！僕のために、怒らないで…」

「でも！！」

「…いつか僕が恨みを晴らす。もし、ノゾムたちが行って薬飲まされたらどうするの？助っ人呼べないし！！もうこれ以上、僕のせいで仲間が傷つくのは見てらんない！！」

「ブイゼル…分かった」

「とりあえず、ギルドに行こうぜ」

「うん」

一方、どこかの洞窟。

「チーム稲妻戦闘員ブイゼル…ほう、なかなかの手練れのような」

「こいつをとらえてオークションで売り飛ばせば、間違いなく高額ですよボス…！」

「ただ、ブラックストーンズとは関わらないようにな。奴らもこいつを狙ってる、別の意味でな」

「はいっ…！」

いつの間にか、ブイゼルには戦闘員という称号がつけられていた。

まるで海賊のようだ…。

でも、海賊をとっちめる仕事をするのが探検隊。

逆の立場だ…。

何で彼が戦闘員とされたのか、それは後々輝く記憶に記されること

となる…。

動き出す、ブラックスーツズではないもう一つの組織。

彼らの目的は、ブラックスーツズとは違い、金もうけ…。

きっとこれまでも、その怪しい薬の数々を売り、高額で買い取らせていたのだろう。

…そこで、一匹のポケモンが立ち上がった!!

次話に続く!!

第三十六話 ドラッグ・ハプニングー！（１）（後書き）

ココにもつ書いときます。

ナエトルさんです。

かつてブイゼルにバトルを売り、さながらスピードを生かしたバトルでブイゼルを苦しめたあのナエトルが、立ち上がります！

お楽しみに♪

第三十七話 ドラッグ・ハプニングー！（2）

「ブイゼル、お前安静にしてろよ。今から薬買ってくつから」

「うん、ありがとう…というか別に病気じゃないんだけど」

「でも動くなよ??」

「動けないんだけど」

「…ごめん」

というわけで俺とポッチャマはトレジャータウンへ。

「…む」

「あ」

トレジャータウンへ向かう途中で、ナエトルとバツタリ。

「え、なに？もしかしてお前もトレジャータウンに??」

「そうですけど」

「…いつしよ行くか？」

「はい」

何でか知らんが、ナエトルも同行。

そしてトレジャータウンについたわけだが…。

「な…!？」

トレジャータウンのすべての人々が、座り込みor倒れているではないか!？

「え…」

真っ先に向かう予定だったカクレオン商店のカクレオン兄弟もへなりと座り込んでいた。

「ただ…大丈夫ですか!？」

「おや、チーム稲妻ではないか…」

「…!!この症状!!」

「なにがあつたんですか!？」

「なんかいきなり襲われて…。」

「…」

「とりあえず、気をつけろよ君たち」

「はい」

何なんだろう…。

その薬は…

「あのー…この在庫ないんですか？」

ナエトルがカクレオンのところに在庫確認。

「その薬なら確かにこれには効きそうだけど、無いんだよねえ、」
「めんなさい」

「…そうですか」

「ねえ…ナエトル、薬に詳しいの？」

「はい」

ナエトルはこっくりとうなずいた。

「俺らの仲間になんない？」

「…え…？」

「だってこの間バトルしてからずっと気になってて」

「…でも私にはまだ実力が…」

「いいんだよ未熟だろうと！！入れ！！お前、名前は？」

「…ハーブです」

「そっか、ハーブ！！お前は今日からチーム稲妻だ！！」

「…はい！」

この時、ナエトルは微妙に笑顔を見せたのだった。

一方ブイゼル。

「安静にしてろって言われてもなあ…やることないなあ」

まるで家事をやりつくし暇などこかの奥様だ。

しかし突然！！

「…あれ…！！？」

突然立ち上がり、歩き出した。

「え！？ちょ…誰か止めて、気分悪い！！」

なんと、ブイゼルの体が勝手に動き出したのだ！！

「やめてえ〜っ！！」

一方トレジャータウン。

こちらでも異変が起こった。

「あれ？みんなどこ行くんだ？？」

「行く先はどこですかね」

「見てる場合じゃないと思うけど」

数分経ったら、大群ができてた。

「どわあい！！」

「てことは、あの薬を受けた人がたくさん…」

「あ、バイゼル!」

「ノゾムっ…助けてっ…!!」

バイゼルが苦しそうに助けを求め、去っていった。

「安静にしてろよっつったのに…」

「まあまあ…」

「行くぞ」

「うん!」

「順調だなあ」

「まったくですねボス」

「いい金儲けになりそうだ」

ボスと呼ばれしそのポケモンは、不気味な笑みを顔に浮かべた…。

第三十八話 ドラッグ・ハプニングー！（3）

「ブイゼルまでえーっ！！動くなっって言ったるー！？」

「ちがつ…勝手に体が動くんだよー！！」

「…！？」

走る大群を追い、走り出した俺たち。

「…勝手に…！？」

ハープがつぶやく。

「ぶーいーぜーるー！！」

「こんなに集まるとは…例のブイゼルというのはまだなのか？」

「おそらくこちらに向かわれていると思います」

一方、ブイゼルの進行方向の先——森の最深部。

「逃走用ヘリは用意されてるよな？」

「はい!!」

「ご苦労」

そのボス…ボーマンダ。

彼はポケモンを狙い、ポケモンに向かって特殊な光線を浴びせるという…。

彼はにたりと笑う。

「ブラックストーンズのようなザコにこんな珍しいものを渡せるかってーの。」

「ボーマンダ様、森に入りました!!」

「…おいドケイル、お前どこからそんな情報を…」

「奴に薬を投入した時、ついでにGPS機能を備えた小型の装置を取り付けました」

「…やるなあ…」

「ありがたきお言葉」

どうやら、このドクケイルと後ろにいるリングマが、ブイゼルに薬を投入した犯人のようだ。

「…来ました!!」

「無様な走りようだな」

しかし、後ろから俺たちがおってきているのを見るなり…

「探検隊か…ま、ぶちのめせるな」

「はい!!」

ドクケイルが俺たちの方へ飛び、

「毒の粉!!」

毒の粉を降り注いだ!!

「…し…しびれる…!!」

その場に座り込んだ俺たちに、さらにしびれ粉をかける。

そして残ったブイゼルに向けて、

「…くらえ」

レーザービームを解き放った！！

「…よけろお……っ……！！」

しかしブイゼルはその場に立ち尽くしてしまい…。

そのビームをもろに受けてしまった！

「ブイゼル！！」

すると、ブイゼルの足元が灰色になってきた。

…石化してる…！！

やがてそれはブイゼルの胸元に達し、ついに口に迫り…。

パキッ…。

ブイゼルが石になってしまった！！

「ブイゼル！！」

ちよつと金色がかった灰色。

そしてボーマンダはそれをいとも簡単に背中に乗せ、へりへと入れ、特殊カプセルの中に入れた。

そしてリングマが乗り込み、へりが動き出す。

しびれ粉と毒の粉によって動けないまま…。

その様子を黙ってみていることしかできなかった。

そしてヘリとボーマンダとドクケイルが遠くへと消えていく。

ようやく毒から解放されたとはいえ…。

仲間をまた連れていかれた…。

その悔しさにのまれ、足がすくみ、動けなかった。

「…ごめん…また…!!」

涙がこみ上げてきそうになる。

「ブイゼル…っ…!!」

一方、ヘリの中。

ブイゼルが石化した状態で、カプセルの中、揺れていた。

割れない石のため、決してひびが入ることはない。

ボーマンダの手に渡ってしまったことにより、ブイゼルの行く末はわからない。

「これで俺たちは相当稼げるな」

「はい!!」

「こいつを、あのピカチュウとポッチャマとナエトルの手に回すんじゃないぞ!!」

「はい!!」

相当強いドクケイル。

まだわからないが、見るからに強そうなりングマ。

ブイゼルが連れていかれた時点で、チーム稲妻の戦闘能力はかなり衰えている。

「…あいつら、失脚してるぞ」

「へっへっへ…」

ボーマンダたちは、チーム稲妻をのしり、あざ笑うのだった…。

次回、ブイゼルの心境に変化が…。

第三十九話 悔しさ、己の弱さ…奪われた仲間…！

「…なんも守れねえ…！！」

「…ノゾム…」

「弱い…俺は…！！」

こみあげてきた涙を必死に抑える。

「…ブイゼル…」

一方、全く動けないまま、固まっているブイゼルは…。

ヘリが本拠地ドラゴンシティに到着。

そしてブイゼルはヘリから降ろされ、ビルの中に連れていかれた。

それも大きなビル。

このボーマンダは、無力なものを蹴り落とし、強いものだけを求めている。

つまり、部下の中には落とされた人も多くいるのだ。

「…もうお前は逃れられない…」

ボーマンダがブイゼルに向かって言い放つ。

カッチカチの石とされたブイゼル。

取り戻しても、石から封印を解くことは、ボーマンダにしかできないのだった…。

そしてカプセルケースから石と化したブイゼルを取り出し、同じような二つの機械の間に置く。

そして機械のスイッチが入る。

不思議なビームが、ブイゼルを襲う。

すると、石化が薄れ…。

「……………ここ……は……………」

ブイゼルが意識を取り戻した。

「…お前は…もう、逃れられない」

「…だ…誰…??」

うつすらと、まだあいまいな意識の中、ブイゼルは記憶を掘り返す。すると、思い出そうとすればするほど、頭が痛む。

「…僕は…」

ブイゼルは、ノゾムたちといたころの記憶を抹消されてしまったのだ。

全て機械の上の大きな球の中に入っている。

「もうお前は俺らのものだ…」

「…なんで…??記憶がない…」

「お前の前の記憶はすべて抹消した」

「…え…?」

「今からは俺たちがお前の記憶を作る」

「…っ…っ…っ…」

ブイゼルはまだ意識が朦朧としていたために、思いつきりぶっ倒れ

た。

「もうチーム稲妻の記憶はないな……」

ボーマンダの笑み。

ブイゼルの記憶。

何もかもが錯乱する。

「……強さはそのままだな」

くるりと向きを変え、ボーマンダは奥の部屋へと行った。

「ブイゼル…!!」

「ノゾム…もうきつと無理だよ」

「…なんでだよ…」

「あいつみたいなのやつの手に渡ったんなら、ブラックストーンズみたいな一匹一匹が弱くて多い集団よりも、一匹一匹が強くて少ない集団の方が強いよ…」

「…」

「もう、助けられないんですか？」

ハープが聞く。

「もう無理だと思う…」

ポツチャマは静かに答えたのだった。

そして、血の気を失ったノゾムはぶっ倒れた…。

「ノゾムっ!!」

「…!!ここは…!!!!??」

「ノゾム…よかった…いきなり倒れたからさ…」

「倒れたっけ俺」

「倒れたよ…」

しかし、石化したブイゼルのあの顔が頭をよぎる。

「…!!」

「助けられないのか…ブイゼルを…!!」

「…かもしれない…」

ブイゼルの記憶の行く末、そしてノゾムたちは絶望の中、ブイゼル

を救うことができるのか!?

第四十話 決意

「…ノゾム、無茶しちゃだめだよ!!」

「無茶しねえよ!!でも…バイゼルを助けるんだ!!」

「…ノゾム…」

「…バイゼルは友達なんだから、俺たちがいなくてどうすんだ」

「…そうだね!!」

さっきのさっきまで意識を失っていた。

でも、同時に決心がついた。

バイゼルを助けること…。

バイゼルを、守ること…。

それは、おれたちにとってたった一つの、バイゼルにできること…!!

「…行こう!!」

「おう!!」

（なんで僕は記憶がないんだろう…）

バイゼルは一人、記憶を思い出そうとしていた。

（なんで僕はこんなところにいるんだろう…）

そして自分の記憶のありかを探す。

（そうだ…僕には…）

バイゼルは軽く力を入れた。

身体のいたる部分から光が漏れた。

（なんだろう…これ…）

そして、その光にのまれた。

『ブイゼル！！』

（…あれは…）

『チーム稲妻に入るのか!?!』

(チーム…稲妻…)

『大丈夫か?』

(この声は…)

『ノゾムもブイゼルも大切な仲間だよ!!』

(…ノゾム…)

そこまで来て、ブイゼルの記憶はよみがえったのであった。

「…そうだ…僕はチーム稲妻の…ブイゼルなんだ…!!」

「な…記憶をよみがえらせた!」

ブイゼルは、すべての記憶が戻ってきたと同時に、反撃を開始したのであった…。

「ハイドロポンプ&冷凍パンチ!!」

「うぐお!!」

自由になったブイゼルは、ビルの中で大暴れする!!

「い い っ け え え っ ！ ！ ！」

俺たちもまた、快進撃を続けていた…。

第四十話 決意（後書き）

遅くなつてすみません。

第四十一話 復讐バトル！？ブイゼル大活劇！！（前書き）

ドタバタです今回は。

第四十一話 復讐バトル!? ブイゼル大活劇!!

「…大丈夫かなブイゼル…」

ノゾムたちは、ブイゼルの記憶が戻った&暴走中ということを知らぬまま、ブイゼルの連れ去られたと思われるビルへと来た。

「でかいなこのビル。探すのもっと難しいんじゃないかな…」

「難しいだろうな…」

「そうですね」

そして中に足を踏み入れた。

ブザー等はならなかった。

「よし、行くぞー!!」

「おおー!!」

そして中へ。

一方ブイゼルは…。

「もう許さないぞーっ!!」

記憶を取り戻したと同時に、ボーマンダたちに猛反撃開始!!

「僕の記憶を奪った罰だ!! 冷凍パンチ!!」

ドラゴンタイプには氷技は効果抜群。

ボーマンダは凍り漬けとされてしまった!!

そしてドクケイルやリングマにもアクアジェットや冷凍パンチ、ハイドロポンプで対応し…。

「まさか、相手がこんなに予想以上に強いとは…!!」

「…見下してるのが悪いんじゃないの?」

「…ぐっ」

なんと、バイゼルは中枢の人物（ポケ物？）を一気にブチ倒してしまっただけ！！

「…それにしても、結構傷が痛むなあ…」

少しずきずきしている腕や脚。

「…この組織、ぶっ壊そうかな…」

「…あれ…バイゼル…??」

バイゼルはその声に聞き覚えがあった。

「…エモンガ？」

かつてバイゼルと旅をした仲間、エモンガ。

「…なんでここにいるの!？」

「さっきのさっきまで捕まってたのよ、あの扉の中に」

エモンガがサンダーボールで開けた穴がぽっかりと見えた。

「…まさか、あの中に？」

「ええ…でもスイッチが壊れてて、すぐに出れたわ」

「そっか…よかった」

「そういうブイゼルこそ、どうしてここに居るの？」

「…いや別にそのえっと」

「もう…変わってないわね…」

「ごめんなさい」

「…もしかして、これ…」

「ん？」

「あんたがやったの？」

エモンガが指差したのは、氷漬けになったボーマンダだった。

「うん」

「…やっぱりそうなのね…」

「ほんとやり方が変わってないでしょ？」

その時。

「…あ…」

「え？」

「氷にひびが…！…！」

「あつ…」

ブイゼルとエモング、ボーマンダとどう戦う？

次回に続く！

第四十二話 最強コンビにようやく到着？

「…よくも氷漬けにしてくれたな」

「…ボーマンダ、僕は恨みがあるからそうやって攻撃したんだけど」

「…恨みねえ」

『ブイゼル、頑張れ！…』

エモンガが後押しする。

「僕は死んでも…お前を許さない！！」

「言ってることめっちゃくちゃなんですけど」

「だから覚悟しろよ…」

ブイゼルは腕に力をため、再び冷凍パンチを放った。

またもや氷漬け。

「ふんどし締めて生きていく覚悟ぐらいもつとけえい！！」

「…かつこいいー」

「冷やかすのやめてよ」

「じゃエモンガ、最後にこらしめて」

「うん？」

そしてエモンガはサンダーボールを放った！！

そしてビリビリと放たれる電撃に耐えきれず、ついにボーマンダはガクリといった。

「勝ったね」

「お疲れ」

ブイゼルはエモンガとの旅を経験してから、協力することの大切さも学んだのだった。

「ブイゼルっ…」

「ノゾム!!」

「ぶ…無事だったのな」

「はるばるごめんね…」

「いいんだよ無事なら」

「…ごめんねホントに」

「いやいいんだってば」

「じゃ、帰りましょー」

「エモンガ、またね。気を付けて帰ってね!!」

それが、エモンガとブイゼルが最後に対面した時だった。

「じゃあね、ブイゼル」

エモンガはブイゼルの顔まで来て、ほおにキスした！！

「!？」

ブイゼルが赤面する。

「バイバイ」

「ブイゼル…大丈夫か？」

「うん」

「ごめんね、もっと早く来れば」

「いいの、僕はぴんぴんしてるから」

次の日。

「ブイゼル、次の依頼は遠いところでサンダーシティまで行かなきゃなんだけど」

「…そうなの？」

「だから、一緒に行ける？」

「
いいよ」

そして舞台は、「チームスターズ&チーム稲妻編!!」に続く…。

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連に横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能^{たんのう}してください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n8016q/>

ポケモン不思議のダンジョン チーム稲妻編

2011年10月16日15時58分発行